.466

トッレブンパ策國事時

(輯一第)

特253
998

旋風裡の極東外交と軍事

角猪之助著

定價金三十五錢

始

特253
998

角猪之助 著

旋風裡の極東外交と軍事

東京・獨立書房

例　言

一、本書は、支那の背後に躍る覆面の威力、即ち歐米の東漸勢力を解剖して避け難い極東戰爭――複雜なる極東時局の發展を說明して、日本の大陸政策に及んだのである。

一、更に、近時世界注視の焦點たらんとする南洋の情勢、並に爰を中心に、渦卷く對日包圍陣の狀況を述べて、日本の海洋發展の急務を說いたものである。

一、列國の重壓化に喘ぐ、日本の國策は、何を目標にして動き、强化さ

れんとするかは、齊しく國民の知らんとする所であらう。

一、要するに本書は、廣く軍事外交方面から論じ、極東及び太平洋問題研究の好伴侶たらしむべく時事問題を中心に、詳さに檢討したもの切に一般の再讀必知を望む次第である。

編者識す

目次

支那を繞る國際不安……一
一、日支國交の岐路……一
二、歴史に健忘症な支那……五
極東爭覇戰と日本の外交……一〇
一、一觸即發の極東の時局……一〇
二、老獪な英國の外交……一四
三、日本を誑す日英同盟復活論……一九
四、英國の試みる對日經濟封鎖……二四
五、横暴な米國の太平洋進出……二八

六、日米の尖鋭的對立時代……三四
七、米國の極東侵略の野心……四〇
八、極東に躍る露國の魔像……四四
九、日露の武裝對峙と國境問題の成行……四九
一〇、極東の爭覇戰と日本の決意……五三

大陸政策と海洋發展策の內容……五八

一、强化され行く我が大陸政策……五八
二、北支の經濟的利用の意義……六一
三、大陸政策の歷史的背景……七〇
四、海洋發展策の重大義……七四
五、南洋に於ける列國の對日包圍陣……七九

六、經濟的に觀た南洋……八二
七、資本投下市場としての南洋……八八

太平洋戰略と南洋……九一

一、太平洋の軍備對立……九二
二、軍縮解消後に於ける列强軍備强化……九九
三、米海軍の對日作戰と日本の防備……一〇四
四、蘭領印度の軍事的位置……一一〇
五、英海軍の極東視角……一一四
六、經濟破壞戰と日本の國策……一一九

旋風裡の極東外交と軍事

角猪之助

支那を繞る國際不安

一、日支國交の岐路

一

日支問題は、いま、全世界の注視を浴びてゐる。日本と支那との唖ひも可なり古い歴史を持つてゐるが、從來の外交紛爭と異つた意味に於て、今度の事件が注意を喚起した。抗日支那のテロ事件は、成都、北海、漢口、上海と相次いで展開され、息詰るやうな空氣は、將に一觸即發の危機に直面した時に、ソヴェット・ロシヤの魔像は、抗日支那の背後から糸を操つてゐるとか、英

國は在支權益擁護を口實に對日牽制策に出てゐる等、いろ〳〵列國の外交上の動きが報導され、極東を中心とせる日本を繞る國際情勢は、極めて際どい危局を孕んでゐるといふことは、今までと違つた注意を惹いたのである。

日支外交關係の決裂は、直に極東戰爭の勃發の導火線になるだらうといふことは、今に始つた議論ではないが、今度の紛爭でどうにも避けることの出來ない危險狀態になつて終つたことを、世界の凡らゆる人々の腦裡に深刻に印象づけたのに違ひない。今日の場合、日支外交の將來如何といふやうな呑氣な問題ではなく、こんなことをいふつてゐては、極東時局に關する限り手遲である。形式的な議會の外交演說や、古い商品賣込主義の外交論が問題とされてゐる間に、既に時局は急速度に進んで來たのである。

二

この息詰る國際雰圍氣から推し考へると、急迫せる極東の情勢と、日本の必然的な大陸政策とを如何に調整するかといふ點が、血のにじむ日支外交の核心でなければならぬ筈である。隨つて一蔣介石の一擧一動が外交關係を左右し得るかどうかの如きは、一つの錯覺だ。蓋し日支外交はこの錯覺を捨てることが先づ必要である。

支那に假令誰が支配者になつた所が、人相手の交渉は、支那では通用出來ないやうだ。昨年廣田外相が用意した對支三原則（排日運動の禁止、北支開發に關する日、滿、支の提携、共產主義に對する共同防禦工作）の新政策も、蔣介石や張群を相手にして、どれ程効果があつたか、今日では既に過去帳の中へ追ひ込められてゐる。

昨年日本は非常な馬力をかけて、この新政策によつて、日支關係の調整をやるのだ、その成否は日支外交のバロメーターと目すべきだなどゝ、獨りで決め込んでゐても事態は急轉して、當時の行政院長汪兆銘の暗殺未遂となり、中山水兵に對するテロとなり、遂に國民政府外交部の三原則否定の聲明となつたのである。今度の川越大使、張外交部長との會談に於ても、交渉が、漸くその緒につかんとするや、今次の不詳事件の突發となつて、時局を極東戰爭の序幕まで追ひ進めて來たのである。

三

惟に、支那位複雜してゐる國がない。蔣介石自身すら完全な、しかも自由な外交上の權限を持

得ないのである。それは政府背後の國民黨部、更に全國的な抗日民衆運動に左右されてゐるからである。しかも列國の尻押しがあり、複雜微妙な外交關係の動きを見逃して、表面的な向背のみを問題にすると大きな蹉跌を來す。現に國民政府部内には、歐米派、親ソ派があり、盛んに活躍して、對日挑戰を計畫し、殊に我が國交調整に關する提案中防共協定の事項に關しては、親ソ派が却つてロシヤと通牒してソ支提携して、日本に共同戰線を布かんとする策謀を廻らし、同時に支那共産黨及び共産軍の背後にあるコミンテルンは、虎視耽々として活躍の時期を待ちつゝある狀態である。

かくの如く、支那の對日感情及び情勢は中々複雜にして、微妙なものがあるので、日本人が考へる一本調子の常識では手に負へない國だ。世間では支那程判らない國がないといふが、それは支那の特異性を考へずして、どうして支那を見ることが出來やうか。第一國民性が既に日本人と違つてゐる。『支那人位駈引のうまい國民がない』と、荐りに云つてゐるが、日本人みたいな一本調子の國民ではないことは事實である。支那には狠、冷、等といふ賭博必勝の三原則がある。狠といふのは、一旦やり出したら裸になるまで徹底的にやり通す。冷といふのは、平然として如何なる挑戰をうけても、じつとしてゐる。等といふのは、機會を狙つてこゝぞといふ時に大きくはる。支那の外交もこの三段構へでやるのだから、日本の行き方とは全然違ふ。況んや叙述の如くその背後に躍る列國の術策が、これと相呼應して、大きな動きを見せてゐるのであるから支那の外交は、中々簡單にはゆかないのである。

以上の見方からすれば、政府背後の列國との外交上の動き、國民黨部の關係、更に全國的な抗日民衆運動の動き等を見逃して、蔣介石の表面的な向背のみを問題とし、且つ彼を相手に外交する從來の日本の遣り方は、寧ろ笑ふべき官僚外交の弱點ではなかつたかと思ふ。

二、歴史に健忘症な支那

一

日本の支那に於ける立場は、その特殊的地位と、特別な關係を見れば、的確な判斷が下せる筈である。然るに忌憚なくいふと、日本の外交が從來これを列國に認識させることに於て、極めて拙劣であつたのか、それとも、寧ろこれを認織させるべく努めても、列國から押しつけられて、

手も足も出なかつたのか知らぬが、兎に角支那問題に關する限り、列國の重壓感は、日本の頭から拭ひ去ることが出來ないのである。偶々日本が滿洲事變を契機に支那大陸に進出すれば、列國は好んで我が日本を支那侵略者として叩き出さうとしてゐる。この國際情勢に對し日本の忍耐力が何時迄續くかといふことは、既に時の問題になつてゐるのである。

日本は『自國存立』の立場から、時として抗日支那に對し文句を並べることもある。その態度如何によれば、高壓的に出ることも、亦止を得ないと思つてゐる。理不盡な支那に味方する列國に對しても抗議することも之亦當然でなければならぬ。これは風呂屋の隣に住んでゐる者は、火災が起つては危險だから、烟突などその他の設備に對し、文句を云ふても、少しも差支がないと同じ理窟である。この事は直に支那への侵略を意味するものではない。これは、日本の支那に對する特殊的地位を的確に判斷す者の凡てが、無條件に首肯し得らるゝ問題である。日本がこの特殊な地位の關係から、今まで支那の爲に却つて莫大なる犧牲を拂ひ、寧ろ支那をして亡國から救つて來たのだ。この事實に對し、支那及び列國が何んと見てゐるだらうか。

吾人は今これを歴史の上に於て強く發言することが出來る。如何に歴史に健忘症な支那でも、帝政ロシヤの侵略主義が、日露戰爭で食ひ止められたことを、よもや支那國民が忘れてゐないだらう。明治三十八年十一月十七日、北京に於て『日露戰爭に基く滿洲善後事宜に關する』談判が開始された時、その劈頭、支那側の首席全權たる慶親王は、我が小村全權を通じ、『貴國は東亞の大局を維持する爲、不幸にして露國と開戰せられ、その以來仁義の師を以て、我が國列祖の皇陵を保護せられ、是れにより安全なる事を得たるは、我が皇太后皇帝陛下及び皇族一同の皆深く感謝する所である。』と、日本に對し最大の敬意を表してゐるが、これは單なる御世辭でもあるまい。

二

泰西の歴史家が『クレオパトラの鼻が今少し低かつたら、どうだらうか。世界の歴史は今日の如くではなかつたかも知れない。』と云つてゐるが、一女性の鼻の高低、容貌の美醜によつてさへ世界の歴史が變るのである。果して然らばこの筆法からすれば、若し『日本がなかつたら、支那の歴史がどうなつてゐたか。』と謂はざるを得ないのである。抗日支那の反省を促す所が爰にある。日本が常に『邊隣の騷亂を好まない』こと、且つまた『いつも脅威を受けてゐることも忍

び得ない。』ことの二つの信條から、從來東洋の平和と支那領土保全に切念して來たのであるが若し日本が帝政ロシヤと戰はなかつたならば、果して支那はどうなつてゐたか。必ずや帝政ロシヤに併呑されて、今や支那は遠き昔のお伽噺の國として、一片の記錄に傳へられてゐたであらう今頃は支那の歴史は何處に消し飛ばされて、亡國の缺けらになつてゐるに相違ない。

支那幾千年の歴史を蘇へし、支那を亡國から救つた者が、莫大なる犧牲を拂つて來たこの日本であることはいふまでもない明白な事實である。支那人たるもの、片時たりともこの事實を忘れてはならぬ筈だ。

三

遼東半島を日本の手から奪つた當時の帝政ロシヤは、早くも滿洲の野を南下するの計畫が具體化して、東支鐵道を敷設し、これに旅順、大連とシベリア鐵道を結びつけ、更にこの兩地を含む關東州を租借し、しかも爰に難攻不落の一大要塞を構へて、いよ〳〵その爪牙を露はして來たのに對し、日本は『東洋平和』と『支那領土保全』と『自國存立』の爲に、憤然と起つて、遂にロシヤと干戈を交ゆるに至つたのである。當時支那は、自分が喰ひものにされることを知らずに、

ロシヤと密に攻守同盟を結んで、日本を叩きつけやうとしたのだから、身の程も知らないのに呆きれる。尤も支那の方でば日本が敗けるものと決めてゐたからであらうが、戰爭は支那の豫想に反して日本の勝利となつた。さうして結果、帝政ロシヤの野望を挫いて、東洋平和の保障と支那の獨立を確保することが出來たのである。

若しも日本がこの時、支那が豫想してゐたが如く、帝政ロシアに敗けてゐたらどうなつてゐたか。露支攻守同盟の如きは踏み躙られて、帝政ロシヤの爲に併呑されてゐたことは勿論の事、列國も亦この雰圍氣に刺戟され、支那を分割してゐたであらう。即ち獨逸が膠州灣を占領し、英國威海衛に據り、佛國も亦廣州を扼して、各々勢力範圍の獲得から遂に支那が分割されて、必然的に地圖が一變してゐたことは見易き道理である。

四

現に日本と直接交渉を持たない他の地域を見れば、一も二もなくこの事が肯かれる。即ち西藏はどうか。甲寅の有樣を見れば吾々のこの語は、決してこじつけの議論でないことは判る。更に外蒙古は如何。支那の領土でありながら、事實上ソヴェット・ロシヤの領有となり、支那人自身

すら旅行居住の自由を奪れてゐるやうな始末である。

かく見れば、支那が今日あるを得たのは、全く日本の仁義によることは、敢て贅言を要せざる所である。然るに支那側は恩惠を全然忘却し、親朋の宣に代はるに仇敵の怨を以てし、日本を制するに、或は英國に賴り、或は米國の勢力を利用し、更にソヴェット・ロシヤに依らんとしてゐる。かくして、何事につけても、支那が我が日本に楯突かうとして居るのである。吾々はこの場合、更に再び『若し日本がなかつたら、支那の歴史がどうなつてゐたか。』を繰返して、忘恩支那の反省を促さゞるを得ないのである。

極東爭覇戰と日本

一、一觸即發の極東の時局

一

以上の議論から押し進めてゆくと、今日極東の危局を招いた直接の動機はどうであらうと、支那の『遠交近攻の外交』『以夷制夷の外交』は、却つて列國の乘ずるところとなり、時局を一層紛糾せしめてゐるのである。假令列國が支那を侵略主義の目標として、その爪牙を露して來ても、しつかりと日本と組んで、東洋平和の爲に、協力してゐれば、必ずやこの危局を緩和することが出來たと思ふのである。

然るに身の程も辨へぬ支那は、自分が喰はれることを知らないで、却つて日本を仇敵視して、歐米に依存せんとする遣り方は、極東の禍因を益々增大せしめつゝあるのである。滿洲事變が起り、上海事件が勃發するのも、要するに歴史に健忘症なる忘恩支那が自ら蒔いた種でなければならぬ。

併し支那は好むと好まざるに拘らず、日本としては東洋平和の確保と、自國存立に切念して、列國の歪曲を是正しなければならぬ責任がある。滿洲國の獨立は、かうした目的の爲に實現したのである。更に列國の魔手を除去して、理想鄕を建設する爲には、現下の國際情勢は必然的に日本が大陸政策と海洋發展策によらねばならぬ。それが爲に極東に野心を抱藏する列國との間に好まぬことだが、假令正面衝突を見ても、日本としては亦止を得ないと考へて居る。

二

現に滿洲事變以來、極東の國際的情勢に急激なる變轉を見せて居るのである。事變に到るまでには、種々多樣の成長的經過を辿つて來たことは、以上の說明で判るだらうが、今、極東政局の颱風の中心が、どう進みつゝあるかについても、大體の觀測が出來ると思ふのである。要するに極東のこの動きは今にも極東大戰が勃發するかの如く見られてゐるのである。例へばニューヨーク・トリビユン紙の北京特派記者ベツフア氏の如き、『極東戰爭』と題する著述を出して、世界の注視を惹いてゐるが、その謂ふ所によると、『極東に於ける紛爭は長年月に亘つて、種々多樣の成長的經過を辿つて來たが、最近起つた事件と、日本の東洋に於ける覇權を目指す躍進により、極東大戰は避けることの出來ぬ危險狀態になつてしまつた。從つて現在は極東大戰勃發の可能性があるか、どうかとの檢討は、既に手遲れだ。どの國が何時、どの國とおツ始めるか？　の極めて際どい國際關係を迎へてゐる。』と論じ、日本とソヴエツト・ロシヤとの關係を擧げて、『戰鬪開始の實現性十二分だ。』と斷言してゐる。それから『愈々日ソ開戰ともなれば、支那は勢ひ禍中に卷き込まれて、ロシヤに加擔するだらうし、米國も極東に於ける自國の經濟的發展力を完全

に確保するために、從來のやうな消極的に靜觀態度をとることは絕對にない。次第に表面化されるに違ひない。さうして米國の肚は、成るべく日本を勝たせず、ソヴエツトに花を持せたいのだ』と、次で日英の關係に及び、『英國の朝野に於て最近日英接近論が强くなりつゝある位だから、極東大戰の口火を切ることは先づない。』との見解を持し、更に日米の關係についても、『兩國は既に尖鋭的に對立してゐるから、若し日ソ開戰がなかつたなら、日米戰爭が避けられない。』と豫言してゐる。

三

果して、この筋書通りに極東戰爭は勃發するかどうかといふことは、遽に豫斷が許されないが東洋に於ける列國の葛藤と、日本への重壓を見れば、容易ならざる難局に直面してゐることが判るのである。

これが極東問題の實相である。將に全世界の注視の焦點となつてゐる極東の危機は、愈々深刻化され、何時爆發するかも知れない事態にある。この時に、日本を中心に展開して來た國際情勢を歷史的に檢討し、極東外交の現勢を解說して、日本の國策を說明することは、複雜なる極東の

國際政局を見る上に時節柄、極めて重要なことゝ思ふのである。

二、老獪な英國の外交

一

支那に於て日本を繞る列國の爭覇戰の實相を眺めると、英國との關係位もつれてゐるものがなからう。英國の極東問題に對する利害關係の動き方如何によつて、日本が利用されたり、背負ひ投げを喰されたり、玩具のやうに翫弄されて、隨分苦杯を嘗めさせられて來た。

最近英國の朝野に於て、問題になつてゐる日英接近論、即ち日英同盟の時代に還れとの議論が行はれてゐるのを見て、日本の一部では、すつかり英國に心を許して、旺んに提灯持ちをして廻つてゐるお目出度いものもゐるが、この國こそ油斷が出來ないのだ。

英國といふ國は流石に老大國といはれるだけに、中々一筋縄ではゆかない。過去三百五十有餘年の英國外交史實を見ると、自己の世界政策の爲には、昨日の良友も平覆の如くこれを棄てゝ、

顧みないのである。その遣り方を見ると、剽狡なること恰も古狸の如きものがある。古い所から話をすると、英國は植民地獲得と、世界商業の覇權を掌握すべく、世界の檜舞臺に乘り出すには、西班牙が邪魔物であるといふので、和蘭と同盟を結んでこれを叩き潰して終つた。それは十六世紀の中葉である。當時西班牙は、葡萄牙の統治を兼ね、アメリカ、アフリカ、東印度等の植民地を領有し、その國土の廣きこと、亦海軍力の大なること、歐羅巴諸國中、一としてこれに匹敵するものはなかつた。そこで和蘭を煽てあげて、その偉大なる海軍力とその廣大なる植民地を奪つたのである。それから六十四年間の後、當時和蘭は、商業、製造、航海、漁業、悉く隆盛を極めて、商船の數三萬四千隻、世界商業に從事する歐羅巴の四分三を占め、歐羅巴の海運業は殆んど和蘭の手中にあつた。然るに英國は佛國と同盟して和蘭を敗り、その世界商業と、その海外植民地を奪つて終つた。而してその次ぎに佛國を凌駕する爲に、約百年を費して、遂に墺地利及びプロシア即ち獨逸と同盟して之を敗つたのである。

二

十八世紀の世界史は、英國と佛國との世界的植民地政策の衝突であつたのである。即ち新興勢

力と同盟を結んで强國を叩き潰し、その同盟國の强國となるや、更に新興勢力と同盟してこれを敗り、かくの如く强國の勢力を奪つてゆくのが英國の筆法である。

亦次ぎに露國の勃興により、英國は印度、アフガニスタン、ペルシヤ等の北境方面で、多年爭つてゐたが、極東に於て露國と利害が相反して、英國と同一立場にある我が日本が、露國の脅威をうけてゐたので、英國がこの場面を利用して、新興勢力の日本と同盟を結び遂に露國をやつつけることに成功した。處が日本との交誼は永續きしたであらうか。人情も友誼も辨へない剽狡古狸の如き英國は、ワシントン會議で米國と提携して平覆の如く盟友日本を棄て、日英同盟を廢棄したのである。日本が世界大戰の時に、盟友英國の爲に莫大な犧牲を拂つて、如何に重要な役割を勤めたかを思へば、假令日本に用がなくなつたからとて、米國と握手して、日本を叩き潰さうなどと考へられるものではない。

惟ふに英國が、日本との同盟を破棄して、米國と接近したのは、西班牙、和蘭、佛國、露國、獨逸を敗つた筆法を、日本に對しても行はんとしてゐるのである。周知の如く、英國は支那に對し最大なる投資を爲してゐる所から、支那問題には非常な關心を持つてゐるのである。然るに日本が支那に於て英國の勢力を凌駕し、商業上に於ても支那は勿論のこと、南洋、印度、濠洲方面まで驥足を延して來た。これが英國の頭痛の種なのだ。この强敵日本を極東から叩き出さなければ枕を高くして寢られない。こういふ陰謀からワシントン會議は米國の『世界平和の恒久維持』といふ美名の下に英國の尻押しで開かれたのである。さうしてその結果、太平洋に於ける日本の海軍力をもぎ取り、支那に於ける日本の行動を牽制するに充分に役立つたのである。

日英の危機、日米戰爭の聲が喧しく傳へられるに至つたのも、必ずしも偶然ではない。

三

滿洲事變が國際聯盟の俎上に乘つて、日本が世界の輿論から袋叩きに遭つたあのとき、英國の策動を考へると、今頃英國が日本に秋波を送つて、日英同盟の復活論を好餌として釣り込もうとしても、日本は容易に英國に心を許されないと考へるだらう。滿洲事變當時、時の駐支公使ラムプソン氏が張學良と提携して暗躍したことや、聯盟の保健部長ライヒマン氏が、支那の衛生狀態視察の名目の下に南京に乘り込んで、宋子文と共に對日惡宣傳を放送して、大いに陰謀これ努めたことなどを思ひ浮べると、日本としては英國に對しては中々怨みが深いのである。

それから昨年英國政府最高經濟顧問リース・ロス氏が悠々と支那に來て、中國幣制改革を斷行せんとして、却つて日本に邪魔され、不得要領の中に歸國したが、問題の成功不成功は別として英國の肚裏は、尠くとも支那問題に對しては、一石二鳥の方法で乘り出して來たものと見るべき理由がある。といふのが、支那に於ける英國の勢力はこの數年來、政治的にも經濟的にも後退を餘儀なくされて來たのである。これは對蹠的に日本の勢力が何處まで支那に食込むかといふ問題と極めて密接な關聯をもつものと思はれる。滿洲を去り、北支を去り、チリ〳〵退陣した英國、型苦しくいふと、支那に於ける英國帝國主義が、どの邊で頑張るかは、蓋し我が國として深甚な注意を要する問題であつた。處が幣制改革問題を通じて、英國の對支政策の發展を見ると、具體的にハツキリして來たのは、北支方面よりも、南支に主力を注ぐ態度を持して來たことである。さうして一歩進んで支那に於ける經濟的な支配權の確立を目指して進んで來たのである。しかし英國が獨りで支那の幣制をどうすることも出來るわけたはないが、こうした英國の動き、これによる對支工作が、自ら日本の勢力を追ふことに作用して來る。爰にこの問題の妙味がある。

三、日本を詛す日英同盟復活論

一

支那に於ける退陣した英國の對支政策は、今までと違つた方向を辿つて、再び喰ひ込まんとしつゝあり、我が日本としてもその發展性に深甚なる注意を拂つて居るが、最近我々の興味を惹く問題は日英同盟の復活論である。英國朝野に於ける最近の日英接近論なるものは、果して眞引なしに聞いてよいかどうか、假令日英同盟復活論が外交折衝の上に具體的に進んで來ても、日本としては待つてゐたとばかりに應諾すべきか否や、餘程愼重の態度を持してかゝらねばならぬと思ふ。

聞く處によると、兩國間の親善協力關係を增進する目的を以て、英國政界の有力者と我が吉田大使との間に、屢々意見の交換が行はれつゝあるとのことである。この問題はどこまで眞面目に進展するか、頗る疑問であるが、英國下院議員ソマーセット・ド・チエア氏の日英接近論は注意を惹いてゐるやうである。即ちその所說は八月十二日付タイムスに揭載されてゐるが、同氏は『大

戰以來の日本の英國に對して盡した恩誼を回顧し、歐洲不安の今日、英國の極東に於ける利益は獨り日本の友情に賴るほかなきこと、』を說き、『日本の支那進出をもつて不可抗的自然現象となし、よろしく速かに日英同盟關係を復活すべし。』と結んで居るのである。この論文を見ると、眞に日本の英國に盡した恩誼に對しては、今更の如く肝銘の深いところを披瀝して居るやうであるが、爰にチエア氏の日英接近論の大要を御紹介する。

『日英接近は日英同盟の廢棄を歎せるものにとつて、歡迎すべきことである。大戰中日本は英國の東方通商路を警護してくれた。英國は日英同盟に信賴して、その艦隊を北大西洋に集中することが出來た。もしそれ太平洋上たゞ一隻の獨逸巡洋艦エムデンによつて與へられた大損害を想起するならば、日本が英國の敵に廻つた場合、日本艦隊全部によつて英國の蒙るべき損害の如何に甚大なるべきかは想像に難くない。オーストラリア人は日本海軍をもつて、彼らの頭上に吊されたるダモクレスの劍だと見てゐる。もし日英關係にして緊密ならんには、かゝる心配は無用となるであらう。

現在英國艦隊は、東洋並に西洋に同時に十分の勢力を集中し得るほど强大ではない。故に歐洲に一旦緩急ある場合、極東における英國領土並に利益の安全は、一に日本の好意に賴らなければならない。

經驗の敎へるところによれば、吾人は日本が支那に進出するのを阻止することは出來ぬ。ナポレオンの言に曰く『支那は眠れる巨人である、起してはいけない』と、しかし西洋文明の曉が、亞細亞の闇に射しはじめた時、巨人は既に崩壞作用を起してゐた。これと反對に日本には西洋文明は全く建設的な效果を齎した。極東において日英が平和裡に提携する餘地は極めて廣く多い。よろくし一九〇二年の日英同盟締結と至らしめたランズダウン卿の政策に復歸すべきである。

日英關係緊密ならんには、英國は何も共產主義のソヴエトロシヤと同盟關係に引きずりこまれる危險もなくなることを忘れてはならない。最後に日英親善は何ら傳統的英米間の友情を傷けるものではない。前者は實際的利害に立脚し後者は精神的協定に基いてゐる。』

この見解は比較的に日本を立場を正解したものといふべきであらう。

二

所がこれより先き英國海相ホーア氏の日英協力私案の內容が傳へられた。これによると、その骨子は『政治的には、日本が支那の領土保全、門戶開放を確認して、英國の在支權益を侵害せざる代りに、英國は滿洲國の獨立を承認して、その開發に協力し、日本の北支に於ける特殊權益を是認する』とある。一寸見ると、これは英國の方でも支那問題については、日本に兜を脫いだ如く思はせるが、問題は却つて逆に行つてゐるのだ。

ホーア海相の私案を中心に、英國の眞意を忖度するに、日本が尙支那に對し領土的野心がある と見てこの前提から『支那に於ける日本の行動を押へ付けてやらう。その變り滿洲國の獨立は既定事實だから如何ともし難いと觀念し、止を得ず之を承認するから、俺の在支權益を侵害するな』と、いふやうに見られるのである。恰も支那に於ける九ケ國條約を振廻して、對日牽制の策謀あるが如く諒解するのである。即ち名を日英親善協力の精神に藉りて、實は日本の伸張力を制限し、當然享有せねばならない優越なる地位を牽制するの意圖に出でたものでなきかを疑はざるを得ないのである。

日本の立場からすれば、現在では英國等によつて、滿洲國の承認、北支に於ける特殊權益の是認の如きは、特に重要視するに足りないのである。亦支那の領土保全、門戸開放は如何たる時代に於ても、總ての列國によつて尊重されねばならぬのである。我が國は豫てからこれを以て一つの國策として始終し、各國の正義感に訴へて來たのである。帝政ロシヤの雄圖を滿洲の野で紛碎したのもこれが爲であり、米國の對支鐵道政策、對支金融政策即ち銀行や借款團による支那侵略を防禦して來たのも、日本の力によるものである。日本としてはこの問題に對し今更ら英國の指圖を受ける必要を認めない。寧ろ日本の外交方針からいへば、列國の注意を喚起する立場にある。ワシントン會議に於て、英米から九ケ國條約の締結を申込んで來た時に、實は日本として苦々しく考へた。今まで荐りに我が物顏に支那を喰ひ物にして來た英米は、今更支那の領土保全とは何事か、盜人猛々しいとはこのことをいふのだと、當時日本の朝野は憤慨したのである。所が英米の關する限り、敵は本能寺にあつた。同條約が名を國際正義の精神に藉り、支那を悅ばして置いて、日本を東亞から叩き出さうとした國際陰謀に外ならなかつたのである。英國は今東亞に於ける時局の變遷に鑑みて、手を變へて、日英兩國の親善協力の名の下に、再び對日牽制の策に出でんとするの意圖に出て來たことは、我が日本として重要視すべき所以である。

三

元來國と國との間に於ける申合せとか、協定とか、條約といふものは、時代の變改に重きを置かねばならないのである。日本の北支に於ける特殊權益、英國の在支權益は、お互に利益の尊重と、國際平和の爲に相互にこれを認めることは當然のことで、今更證文の遣り取りをする必要がない。それよりも英國が、眞に日本との親善關係を結ばんとする熱意があれば、他に重大なる問

題がある。それは何かといへば極東並に日英通商關係について、全面的に日英が提携することである。この熱意こそ兩國の親善關係の礎石となるのである。凡そ國家間の平和事業は、新しい利害關係の衝突する場面を檢討して、協力提携するといふのでなければならぬ筈である。この問題こそ平和事業の礎石となるのである。

四、英國の試みる對日經濟封鎖

一

日英兩國に於ける新しい利害關係の衝突といへば通商經濟問題にある。躍進日本の進出は英國の通商政策を脅かしてゐるかも知れないが、實際問題として我が國の伸張力を制限してゐるのも亦、英國の通商政策である。英國が躍進日本の進出を全面的に阻害してゐることに關し、何等の考進を促さないで、滿洲國の獨立は既定事實だから如何ともすることが出來ない。北支那に於ける日本の實力進出はどうも仕方がない。英國の權益を侵さない限り、我慢の外がないといふやうな態度では、何等兩國間の親善協力關係の增進にはならないのである。

元來國際上のことは利害關係の衝突あるところに、協力提携の必要が叫ばれる。利害關係なきところに國際關係は存在しないのであるから、現時日英間に於ける利害關係からすれば、この經濟關係、通商問題を調整しないで、何の親善協力關係の增進ぞやといひたくなる。

英國は數年前オツタワに於て英帝國會議を開き、大英帝國を打つて一丸とする經濟ブロックを作つた。つまり經濟的に大英帝國を外國の經濟進出に對して、鎖國するのである。その結果濠洲から經濟的に日本を閉め出しを喰はした。印度から日本を排斥し、更に和蘭を煽動して、南洋に於ける日本の經濟的通商的地歩の覆滅を計つて置きながら、これを解決せずして親善關係が結ばれるものではない。又支那に於ける關稅を英國が事實上掌握してゐるのである。その經濟ブロックと支那關稅を押へることによつて、日本に對抗し、濠洲、印度から閉め出しを喰して、尙支那に於ける日本の經濟的進出を阻害する策謀を廻らして置きながら、たゞ滿洲國と日本の北支進出だけを承認するから、これで日英同盟を復活して、親善關係を增進しやうではないかとは、餘りにも愚弄した話ではなからうか。

二

日本は何時も、英國のいふがまゝに服從すると思つてゐれば、大變な錯覺だ。英國は東亞に於ける露國の脅威を除去する爲に、日本をお先棒に使つたり、煽上げて同盟親善の關係を締結した明治三十年頃の日本と、今日の躍進日本とは全然趣を異にしてゐるのである。何時までも、老獪な英國の筆法に翻弄されて、易々諾々としてゐるが如く、甘く見るのが間違つてゐないか。英國としてはこの際國際政局を達觀して、よろしくインチキ外交を排して、眞に兩國間の紛爭の原因となるべき問題の除去に熱意を披瀝するにあらざれば、到底永久に兩國間の親善協力關係が結ばれないことを斷言して憚らないのである。

實際英國といふ國は一筋縄ではゆかない。實に老獪な遣り方には呆れざるを得ない。西藏のやうな人目の屆かない、亦は他國の實力の及ばないやうな所を何時の間にか、自分の手に收めて、印度の背面を完全に擁護してゐる。一方には亦シンガポールに大軍港を築き、軍港の防備を旋し艦隊航空機等の勢力を增して、一朝有事の際に備へて居る。これが英國の遣り方である。

三

最近北支那に日本が無遠慮に進出して來るのが、如何にも東洋の平和に害があるからとて、ロイド・ジオーヂ、ボールドウイン、イーデン等の巨頭が口を揃えて、英米露三國協商して日本と對抗すべしとか、或は英米と同盟して日本を押へなければならぬといふやうな、對日壓迫の議論も强く行はれてゐることを、吾々が忘れてはならぬのである。廣大無邊なる領土を有し、世界各地に莫大な利權を扶殖せる英國が、躍進日本の將來と兩立せざることあるは已むを得ざる趨勢である。が、併し、獨逸、伊太利の無軌道外交を如何ともすることの出來ないやうな歐羅巴の情勢を差し置いて、今日直ちに積極的に英國が東洋に進出して、力を以て日本を押へつけるといふが如きことは、到底出來ないだらうが、軈て歐羅巴の政情が安定し、東洋根據地の强化完成の日を俟つて、獨特の外交術を以て、日本壓倒劇のステージ・マネージヤーたるの役割を買つて出ずと、誰が斷言し得ようか。

今日英國の朝野に日英接近論が擡頭して、日英同盟復活論が强唱されてゐるからとて、英國に心を許してよいかといふへばさうではない。恐らく、ロイド・ジオーヂ氏等の唱へる叙上の對日壓迫論が、將來英國外交を指導するものと思はなければならぬ。これ日本として、心を奪はれずに、警戒すべきでなからうか。

五、横暴な米國の太平洋進出

一

次に米國はどうであるか。

過去二十年間、日米戰爭の危機がきさし、今日の猶兩國の關係を險惡ならしめてゐるが、この最大の原因は勿論支那問題にある。米國はジョン・ヘー以來、支那に對し門戸開放、機會均等主義を叫んで居るが、こんな得手勝手な外交の方式がない。一體米國といふ國は、横車を押すことに於て世界的の選手である。自分の國はモンロー主義で、堅く扉を閉じて置きながら、他の國に對しては門戸開放を要求し、國際正義の美名の下に、野望を遂げやうとするのであるから、その横暴なること夏の驕王の如き感がある。

米國は資本主義後進國として、遲れ馳せに支那に目をかけて來たが、その時は既に列國の支那に於ける縄張りが決つて居つて、容易に獅子の分け前にありつけなかつた。そこで米國が考へたのである。政治上の勢力範圍の劃定が先づ別として、貿易と投資による所謂經濟侵略による支那

への進出には、現狀打破でゆかなければならぬといふので、一八九九年「オープン・ドア・プリンシプル」即ち門戸開放、機會均等主義の宣言となつたのである。

抑々この名案の生れた動機は、最初英米協調して、當時支那に領土的野心滿々たる獨逸、露國を對照としたのであつた。然るに日露戰爭後極東の舞臺が廻轉して、露國に代つて日本が支那に於げる立役者となり、歐洲大戰後は愈々獨逸も支那から後退して、日本に鋒先を向けて來たのである。そこで米國は、常にこの「オープン・ドア」主義を振り廻して、何事かあると、何のかんのと因緣をつけて、日本の利權問題や活動を抑制してゐるのである。さうしてこの傾向は年と共に劇烈を極めてゐる。のみならず、米國は武器を以ても、この「オプーン・ドア」主義を支持しやうとしてゐるのである。

二

早い話は、滿洲事變以來、米國の艦隊を太平洋に集中して、この方面の準備を着々と强化してゐる事實を見れば、敵國意識のあること、直に明瞭であらう。滿洲事變、續いて上海事變の後に米國政府部内には、嘗てなき轟々たる批難が擡頭して、「抑々、日本が不義條約に違反する手段

で、領土の改變を圖るなどは、米國として斷然許容出來ないところだ。支那からの滿洲分離は條約上無効である。」などゝ、政府の意見を海外に宣明して、聯盟及び世界の輿論の音頭取りとなり、日本を袋叩きにする計畫を樹てたのである。現に國務卿スチムソン氏が、『日本擊つべし。』とする主義論者であつたことが隠れもない事實である。

當時、この問題が危機迫りながら、日米戰爭にまで發展しなかつたのは、いろ〳〵理由があるが、大體に於て政府として對日軍備の上に自信がつかなかつた爲であることは、軍令部から國務卿に報告してゐる事實から推して明らかである。若しあの時、政府に自信があつて、開戰の態度を決してゐたとすれば、平常戰爭に冷淡な米國民であつても、忽ち戰爭熱に煽り立てられて、大變な騒ぎとなつたに違ひない。

乍併、事實は戰爭の開幕が一時延期されたのに過ぎない。その米國としては、傳道的に對極東政策の精神があり、亦、支那に對し現在の利害關係以上の關心を持つてゐる事情から見て、どうあつても、日本と一勝負つけねばならぬ立場に迫つてゐる。――かういふ看方は、現に米國に於てさえ行はれてゐるのである。

この米國の現在の立場と肚の底は、後段で逐次闡明にするが、先づ順序上、米國の太平洋進出の歴史的事實を回顧しながら、肚の中を探ることにする。

三

布哇諸島が佛國の侵略の餌食にならうとした十九世紀前期後半のこと、當時米國はまだ西海岸諸州の統一成らず、しかも布哇まで、二千哩以上の距離があるに拘らず、膝元で火事でも發見したやうに、騒ぎ立てたものである。即ち一八四九年、時の大統領テーラア氏は議會に對し、重大なるメツセツヂを送ると同時に、國務卿ダニエル・ウエブスタア氏をして『米國は、布哇が歐洲大商業國の何れの國よりも、占領されることを極力反對する。』旨の所信を開陳させ、次て間もなくフイルモア大統領就任するや、『布哇が、北米極東間の通商路に横つてゐる重要地點であることを考慮すれば、布哇は是非とも獨立狀態にしておくべきだ。特にカルフオニア、オレゴン兩州で米國が獲得してゐる急激、且つ尨大な利益發展の見地からすれば、かうした處置は實に適切重要である。歴代の政府は、これを以て傳統精神とすべきであらう。――』と、蓋し米國の太平洋乗り出しの礎石はこの時代築かれたのである。

一九三二年、フーヴア大統領及びスチムソン國務卿のとつた、滿洲事變當時日本に對する處置は、恰も布哇問題に對する佛國に當る以上の遣り方ではなかつたか。滿洲事變と布哇とを置き換えて、現在の日本を大商業國と見做せば、米國の極東に對する傳道精神、並に支那に對し何を要求してゐるかは判るであらう。

話は更に遡るが、支那が歐洲列强のため、盛んに領土を蠶食されてゐた當時、そのドサクサに交つて、米國が列國の向を張つて文化と投資を餌食して支那に乘り出したその水際立つた遣方は實に鮮なものであつた。支那の機嫌をとる事頗る巧妙で、しかも他國の領土的野心を抑制するかの如き方法をとつて、これを以て支那を悅して置いて、通商と經濟上の權益を獲得して、刻々、政治上有利な立場を築き上げた手練を見ると、極東にはなくてはならぬ立役者である。

四

尤もそれから或る期間、極東に無關心の時代もあつた。といふのは第一に、一八六一年から六五年に至る例の南北戰爭の次に、一八七三年から九三年にかけての恐慌、及びその後の大景氣時代のためである。この大景氣時代には、尨大なる鐵道網が完成され、天然自然の富源は、到る所で開發され、土地は開墾される。諸發明が工業の大發展を促す等、國內はこの大活況の爲にホクホクの有樣であつた。『ドルのうなる國』と呼ばれたのは、實にこの時代である。

國內がかくの如く素晴らしい景氣だつたから、米國としては他の大陸に權益漁りに狂奔する必要はなかつた。寧ろその暇がなかつたといふた方が本當かも知れない。然し、これは一九〇〇年までの特殊な現象に過ぎなかつた。愈々儲け話の種も少くなり、農產物、工業品の生產品が國內で消化し切れなくなると、捌け口を忽ち國外に見出さなければならぬ。これが即ち佛國の布哇領有に對する反對騷ぎになつた譯である。

おまけに米國は、その布哇をセツキンレイ大統領時代に占領し、米西戰爭起るや、フイリツピン及びキニーバを擅有し、歐洲大戰後には、日本を威嚇して、軍事上最も重要な舊獨逸領だつたグアムも横取りして終つた。

米國は爰に於て完全に太平洋を踏み跨ぐことが出來たのである。併し彼の本當の目標は、これ等の島嶼にあつたのでは決してない。亞細亞大陸、殊に支那こそ米國の關心を招く最大の標的でなければならぬ。

蓋し前段の「オープン・ドア・プリンシプル」主義こそは、叙上の如く支那に於ける投資と通商、所謂經濟侵略を標的として、高く掲げたところの米國の行進旗でなければならぬ。眞に米國こそ怖るべき侵略者なりといふべきである。

六、日米の尖鋭的對立時代

一

一體、日本と米國とは日露戰爭まで極めて親善な關係にあつた。それは米國の極東政策の上からすれば、當時東洋に猛威を逞うしてゐた帝政ロシヤは唯一の邪魔物であつた。滿洲及び支那に於ける覇權を握らうとすれば、お先棒に日本を利用して露國を叩き出さなければならぬ。かやうな經緯から兩國の親善關係が結ばれてゐたのである。だから日露戰爭の時には、陰に陽に日本の同情者として大いに盡し、二億六千萬圓の戰費を供給するなど、好意を表したことはこの爲であつた。

所が戰爭が終つて、日本が滿洲から露國の勢力を排除するや、腹に一物のあつた米國は直に日本資本と平等の權利を以て、鐵道及びこれに附隨する一切の權益に參加せんことを要求して來た。即ち一九〇五年鐵道王ハリマンの滿鐵乘取計畫がそれである。この問題はポーツマスの日露媾和會議から歸朝した小村外相の先見により直に粉碎されたが、若しあの時米國の野心が遂行されてゐたらどうであつたか。滿洲國が今日の姿にはならなかつたことは勿論のこと、日本の運命も思ひ半ばに過ぎるものがある。今更小村外相のこの偉大なる功績を讃えざるを得ない。

これより極東に於ける日米の露骨な爭ひが展開されたのである。米國は滿鐵乘取り策の失敗の腹癒しに、滿鐵併行敷設權（法庫門鐵道問題）、それから一九〇八年の滿洲銀行設立問題、續て翌年滿洲諸鐵道中立案を提げて、日本に挑戰して來た。

二

併し米國の計畫は、相繼いで失敗したといふものゝ、米國の雄心は未だ去らなかつた。タフトが大統領に就任するや、彼一流の外交手段により、中部支那に於ける鐵道の新踵敷設權を獲得すると共に、對支借款問題を提げて支那に進出した。米國が莫大な投資で、ボロイ儲けをしたのはいふまでもない。即ち當時世に謂ふ、米國資本の割込み運動、湖廣鐵道建設、支那幣制改革借款

問題等これである。

聽て歐洲大戰の幕が切つて落された。歐洲列國は極東に於ける勢力抗爭を中止して支那から引退ることになつた。たゞ殘されたものは、日本と米國のみである。兩國は勢ひ極東で直面せざるを得なくなつた。爰に未曾有の日米の尖鋭的な對立時代が描かれたのである。

その深刻な對立を物語る第一の事實は、一九一五年日本の對支二十一個條の要求に絡る米國の妨害運動である。即ち米國が日支間の商議終結に先き立ち、國務卿ブリアンをして『米國は支那の安全、門戸開放主義並に米國の在支權益を損ふやうな協定は絶對に反對である。』旨を宣言させ、談判の進行を停屯させた事件である。

日本が進まうとすれば、米國が必ず因緣をつけて妨害する。全く犬猿も啻ならぬ間柄である。それから歐洲大戰後日本はヴェルサイユ平和條約で山東省の膠洲灣をとつた。所が米國は斷然承服しない。ヴェルサイユ條約の無効を唱へると共に、ワシントン會議を召集して日本をして遂に支那に還附させた。このワシントン會議、次てロンドン會議は極東に於ける日本牽制策に用ゐた陰謀であつたことは說明するまでもない明白な事實である。嘗て日本が遼東半島還附の三國干涉

の苦驗を、再びワシントン會議で嘗め、更に大戰參加の代償として貰ふことになつてゐた、叙上のグアム島までも米國に横取りされたのである。

三

更に滿洲事變に對する米國の立廻りは既に述べたが、これだけでも日本の米國に對する怨みが容易に清算されない。翌つて、一九一九年から二一年に至る間、シベリヤに於ける日本に對する干涉、妨害運動は、實に兩國間に重大な場面を釀したこともあるが、例の移民禁止法當時は、今にも日米開戰になるのではないかと、危ぶまれた程の興奮ぶりであつた。

その他、不戰條約問題、海軍のパリテイの問題、支那に於ける双橋の無線電信問題、等々を數ふれば、凡て危機の一頂點を劃してゐる。

尙、次に觸れておかねばならぬ問題は、米國の滿洲國に對する態度である。

滿洲國の獨立に對しては、米國が躍起となつて妨害運動を試みたことは、既に述べた通りであるが、今日、猶、如何な態度を以て、これに臨んでゐるかは、吾々の重大なる關心事でなければならぬ。即ち一九三二年一月七日、米國政府は、國務卿スチムソンの名で、日支兩國に對し抗議

的通牒を出して曰く。――『米國は、支那の領土保全の侵害、門戸開放機會均等の精神を蹂躙し、且つ不戰條約に違背する手段によつて生ずる局面、盟約、議定の如何なるものも認容する能はざるものなり……』と、これが所謂スチムソン・ドリトリンと呼ばれる主張である。

所で、爰に問題となるのは、スチムソン・ドリトリンが明らかに宣言する『新滿洲國の否認』となつて、今日まで持ち越されて來たこの事である。

四

一體、國家の承認とか不承認といふやうな事は、單に法律上の立場であつて、大した結果がない。例へば米國のソヴエツト・ロシヤの否認――今日では法律上承認をしてゐるが――に例を藉りてもよく判る。乍併、米國の『武力手段によつて滿洲に於て生じた局面の法律的否認』になると、結果は、ソヴエツト・ロシヤの場合と、斷然違つて來るのである。といふのは、米國は滿洲を支那領土の一部分と見、日本が侵略的に剝奪したのだ、と米國持前の意見からすれば、國際法上の議論はどうであらうと、事實問題として、主觀的態度より一歩進めて、ある明確な行爲に出でなければならぬことになる。

米國が猶、滿洲國を支那の一部と見做してゐるとすれば、滿洲國の現存法律は、外國人に對して適用することが、全然無効であるといはなければならぬ。例へば、課稅問題、米國にとつて特に利害關係を有する石油の獨占の如き、外國人の事件に適用される諸法令は悉く違法となる。

併し、滿洲國の存在は、嚴然たる事實である。政治的に支那の支配から完全に離れて立派な獨立國になつてゐる。米國が如何に否認せんとしても、この事實を無視することが出來ないだらう。然らば、滿洲國の制度法律を受認せねばならぬが、この意見からすれば、これが受認が出來ないことになる。然らば米國人が免かれる爲に何等かの方法をとらなければならぬことになるが、これには、妥協か武力解決かの外にその方法がない譯である。しかし問題が一つに米國が讓歩して滿洲國を認めるか怎うかに懸つてゐる。日本側では絕對に讓歩するといふことがないのだから、米國の今後に於ける滿洲國に對する以上の態度こそ、米國の極東政策の問題と照り合して、蓋し興味ある問題であらう。

吾人が、米國に關する限り滿洲問題の發展だけを見ても、今後日本との關係に於て、新らしい懸案を齎し、愈〻事態の紛糾を豫想することが出來る。

七、米國の極東侵略の野心

一

由來米國が歐洲方面には、殆んど無關心である。伊太利がエチオピアの領土を犯さうと、スペインの革命がどうならうと、我不關焉の態度をとつてゐる。併し、事一たび極東問題、就中支那の問題になると、相手構はず、大童になつて息卷くのが常だ。殊に日本に對しては目の上の敵として追ひ廻してゐる。

何故米國は歐洲を捨てゝ、極東にのみあくせくしなければならないのか。これは今まで述べ來つた如く、極東に於ける米國が優先的開拓利益を期待してゐるからに外ならない。『歐洲には、最早開發餘地が少しもない。極東支那こそ、米國が發展し得る唯一の地盤だ。從つて列國がこの支那を荒すのは、米國にとつて最も迷惑千萬なことだ。』これは野心米國の本當の肚の中である。

米國は支那に對し二億弗の投資と、三億弗の貿易高を持つてゐる。對支輸出の狀態を見ると、一九一〇年から一九三〇年に至るその增加額は約六倍に達してゐる。この點から將來更に大なる

發展を豫測すれば、米國の野心を妨げるやうな他國の行動に對し、躍起となつて妨害を試みるといふのが、彼の信條である。しかも歐洲各國の對支貿易が年々後退する一方だが、日本のみが益々躍進を續けてゐる。競爭の相手は日本だ。日本さえ遣つ突ければ、米國が獨り舞臺になる。かういふ考は、日本を怨敵としてつけ狙つてゐる所以である。

二

吾人は以上述べ來つた米國の極東野心を解部し、鮮な太平洋進出ぶりを歴史的に見るときに、殆んどこれ等の問題と樣古もありさうもないペリー提督の浦賀來航の意味にも、重大なる關心を持つて判斷を下さゞるを得ない。歴史の先生は、『米國はあの時、單に日本に開國を求め、貿易をすゝめ、そして亞細亞大陸への商業發展を擴張しようとしたに過ぎぬ。ペリーは正義の士で、彼こそ新日本文明の誘導者であつた。』と敎へてゐる。正義と自由を表看板にしてゐる米國に眩惑されてゐる日本人の一部には、さように思ひ込んでゐるものもゐるかも知れないが、中々さうではない。吾々は敢て無稽なこととといふたり、好んで米國を攻擊して、悅しがる偏狹な考を持つものではないが、現に米國海軍省が、世界に公開した古い記錄の中に、ペリー來航當時の文書があ

る。それによると、當時世界的精鋭を誇つてゐた、その東洋艦隊十二隻をマデイラ島の天然港に碇泊せしめて、彼自身まづ旗艦に坐乘し、護衛艦を率ゐて日本に向はんとするとき、本國海軍省に對し、『――余は東洋艦隊を率ゐて、これより日本諸島の占領に着手せんとす――』とある。

爰が問題になるのである。幸に日本が米國に占領されず、事なきを得たが、浦賀灣頭に兵船を浮べての開港强要の當時を考へると、單に日本へ開港を求めに來たとばかりに思へない理由がある。その暴慢なる態度を永久に忘れることが出來ないのである。當時米國が日本を征服しよう、掠奪しようとしてゐたことは隱れなき事實で、尠くとも日本を東洋根據地として、彼の保護下に置きたかつたであらうことは、如何なる親米派と雖、否定することが出來なからう。何と抗辯しようとしても、官省記錄に確乎として記されてゐるこの事實を抹殺することが出來ない。

三

日本に對する米國の欲望は取りも直さず、征服そのものであり、掠奪者であるところのその本性は、時代が移り、國際時局が變轉してゐても、四億の人口と無限の富を抱藏してゐる支那の大市場が、この地球上から抹殺されない限り、決して失せないのである。蓋し米國の極東侵略の雄圖は、疾くも布哇問題で佛蘭西に楯ついた時から、植付けられてゐたのだとすれば、恰もペリー提督の來航は、その時より四ケ年後の出來事になつてゐる。當時佛蘭西は既に極東に乘り出して表面我が德川幕府を扶けると見せかけて、日本を籠絡せんとしてゐた時であるから、米國もこれに刺戟されて、日本へ乘り込んで來たことは容易に判るのである。これを考へると危く日本も米國に占領される所であつたが、それにつけて、思ひ浮ぶことは、數年前米國ペリー提督のお孫さんが來朝された時、新聞は筆を揃えて『日本文明の恩人、ペリー提督の孫孃來る。――浦賀にて記念碑前に感激感謝の美しき集まりがあつた。――』と書いたものである。地下に眠つてゐるペリー提督が若しこの記事を見たら、赤い舌をペロリと出したことであらう。

四

吾々は何時までも意地きたなく、米國を呪ふ程、感傷的にはなつてゐないが、米國の太平洋進出ぶりと、極東に對する野心、それから日本への敵對行爲等、いろ〳〵檢討するにつけ、ペリー提督來航の官省記錄を見て、洵に感慨無量に堪えざるものがある。

かくの如く、日本が米國に狙まれること、既に久しい。極東の新しいヘゲモニーを握るべく野

心滿々たる米國と、東洋の盟主を以て任ずる我が日本とは、何時まで角を突き合せてゐることになるか。亦この局面が如何に展開してゆくか。支那を繞る日米の關係は、次に述べるソヴェットロシヤとの問題と共に、世界注視の焦點となつてゐるが、これは所謂東洋の火藥庫とならずんば幸である。

八、極東に躍る露國の魔像

一

最近の支那時局に對して、最も大きな波紋を描いてゐる事柄の一つは、ソヴェット・ロシヤの東洋への再進出である。

管々しく露國の東方經略、對支政策につき歴史的に述べることを避けるが、ソヴェットはいふ迄もなく、赤化主義と武力と兩刀を使つて、苟も隙間がある所には猛進して來る。現在彼が最も力を注いで居るのは支那である。從つてソヴェットの東方經略に三つの方向を持つのである。その一つは外蒙新疆を根據地として、滿洲國を脅かし、更に北支方面からも手を延して、日本を襲ふ計畫のあること。その二つは長江一帶から上海を襲ふて列國の在支勢力を覆滅すること。その三つは崑崙山脈から印度への赤化侵略である。これは一九一九年カラハン氏名義の『既得權の放棄』といふ宣言で、支那の民衆を狂喜させて置いて、ユーリンを送り、ベイケスを派し、次いでヨッフェの訪問となり、一九二四年に露支基本協定の成立となつて、愈々赤露の活躍が開始され列國を唖然たらしめたのである。ソヴェットと支那との關係は、時には一九二九年の露支戰爭あり、張作霖の露國大使館の搜索事件、次いで蔣介石の共産黨壓迫となつて、露國勢力の驅逐策、國民政府の對露國交斷絶等があつて、一時その關係が中絶されたが、これもホンの一時の出來事に過ぎなかつた。

二

新しいソヴェットの對支活動は、帝政時代の如く單なる領土的野心でなく、赤い思想を支那の青年や農民に吹き込み、打倒帝國主義、打倒軍閥の思想を植付けて、組織ある排外運動を結成すべくこれ努め、支那をしてプロレタリヤ專制の世界政府樹立の段階であると心得てゐるのである現に昨年第七回インターナショナル大會に於て支那共産黨を援助し、日本に對しては凡らゆる抗

日團體の統一と、團結の下に活潑な活躍を開始する旨の決議をして居るが、ロシヤの東方經略の動向の半面に、支那の共匪と氣脈を通じて、日本に脅威を與へてゐるといふことを忘れてはならないのである。

所がソヴェットの東方經略の發展過程に於て、滿洲事變による日本の北滿進出、北支への發展は、確かに彼にとつて大きな痛手であらう。滿洲事變中ソヴェットが日本勢力の北上を阻止すべく、遽に外蒙に兵力の集中を計り、馬占山援助の爲に武器彈藥を供給し、西部國境北部國境から共產軍を總動員せしめたとの噂もあつた位である。然るに事變熄んで、日本の全滿洲の覇權が確立すると、ソヴェットは北鐵を滿洲國に賣り拂つて、恰も、北滿から後退したかの如く見せかけたが、却つてそれはソヴェット極東軍備の强化となつて顯れつゝあるのである。

滿洲事變中、馬占山を援助したソヴェットの極東軍備といふものは、實際をいふと微々たるものであつた。當時は恰も所謂五ケ年計畫に着手した當座で、日本の電光石火の如き神速なる滿洲討伐に脅えたのである。この勢を以てすればシベリヤも日本に奪られるのでないかと、內心非常に恐れたのが事實である。そこで五ケ年計畫を勵行し、續いて第二次五ケ年計畫を行ひ、今日は第三次五ケ年計畫を遂行中で、その結果東亞に於けるソヴェット・ロシヤの軍備は急速に强化されたのである。黑龍江の露國側には難攻不落の防禦工事が出來、數百臺のタンクと、二十萬の兵力を集中して居る。ソヴェットの極東軍備の現勢については、既に世に傳へられてゐるが、その飛行機も現在世界に於て有數なものになつてゐる。滿洲事變當時は非常に脅えたのであるが、現在では寧ろ日本を侮るやうな有力な軍備が出來上つてゐるのである。而してその軍備は陸軍ばかりではなく、浦潮を要塞化し、これに空軍根據地を置いて日本工業大都市の爆擊準備にをさ〳〵怠りない狀態である。更に亦浦潮には少くとも四十隻の潛水艦は準備され、旺んに歐洲から材料を取り寄せて建造中であるといはれてゐる。

三

これは何を狙つて居るかといふと、極東のソヴェット軍は、何といつても鐵道によつて、本國と連絡してゐるのであるから、そこに弱點がある。この鐵道を何處かで一寸絕たれると極東は孤立する。然るに日本の海上輸送力は極めて優秀で、到底汽車輸送の比でない。何十線の軌道が通じてゐるのと同じであるから、歐洲戰爭當時獨逸の筆法に倣つて、多數の潛水艦を以て日本の交

通聯絡を脅かす、滿洲への大軍の輸送を阻止してやらう。これがソヴェットの狙ひ所で、日本としてはどうしてこれに對抗するか。これは今日、日本の頭上に浴せかけられてゐる問題である。

現在ソヴェットが計畫してゐるのは、歐羅巴と鐵道線路で連絡して、それによつて極東軍が養はれてゐるのが危險であるから、極東方面に大軍需工業を起さなければならない。極東は假に本國を遮斷されても、自給自足が出來るやうな狀態に置かねばならぬ。かういふ着眼點で準備をやつて居る。第三次五ケ年計畫はそれである。

かやうに軍備に熱中すると共に、獨逸に背後を脅かされないやうに佛蘭西と軍事同盟を結び、亦金に困らぬやうに英國と手を握つて居る。かくして軍備と同時に巧妙な外交戰術により、益々地歩を固めつゝある。ロシヤたるもの愈々これで喧嘩腰が強くならざるを得ないのである。しかもソヴェットは米國の弱點を巧みに捕へ、利益を見て親善關係を復活し、米國も亦對日重壓政策の立場からソヴェット・ロシヤと握手するの利益であることは、恰も日露戰爭前極東から帝政ロシヤを葬るべく日本を利用したと同じ筆法を以て、ソヴェットを懷柔してゐるのである。同じ目的の爲に惱んでゐる兩國は、勢ひ情意投合することは當然で、ソヴェットは得たり賢しとして、この國際情勢を有利に轉廻せんとしてゐる。日本は腹背に敵をうけてゐるのと同じ狀態に置かれてゐるのである。

九、日露の武裝對峙と國境問題の成行

一

滿洲事變を契機として日ソ關係の重心は、滿洲に移り、矢繼ぎ早やに面倒な問題が起り、險惡なる狀態が一度ならず發生してゐる。ソヴェットが北鐵讓渡によつて『北滿洲より退却』を決行したが如く見せかけたので、兩國の關係は緩和された如き印象を與へたが、事實はさうでなく、却つてソヴェットの極東軍備の强化となり所謂『退いて守る』の態度に出たため、日滿兩國とソヴェットは、國境をはさんで武裝對峙の姿勢をとるに至り、將に暗雲に閉されてゐる。

日露間の不愉快な關係の中で最も注目すべき問題は、國境異變としていはゆる越境事件の勃發である。滿洲國政府の發表によると、滿洲國建設以來本年一月末までに滿ソ、滿・外蒙國境を通じ二百四十七件の國境事件が起つてゐる。最近に至つて更に數を增し、しかも楊木林子事件、綏

芬河北方事件、金廠溝事件、長嶺子事件、それから綏芬河附近の不法射擊事件等があり、何れも日滿國境警備隊とソヴェートの正規兵の正面衝突による血腥い事件が繰返され、國境一帶の空氣は益々險惡を告げ、愈々兩國の關係が尖鋭化して來たのである。

近頃、この雲行を見ると、實に厄介な問題で、或は、時と場合によつては、再び日露戰爭を起す原因になりはせぬかと憂慮してゐる向さえもあるが、尠くとも兩國間に於ける紛爭の禍根を爲してゐることは否むことの出來ぬ事實である。

二

一體、ソヴェットと滿洲の國境、滿洲と外蒙古との國境は條約によつてその境界線が決てゐることにはなつてゐるが、實地を調べて見ると、現在國境の境界線がはつきりしてゐない。一六八九年に尼布楚（ネルチンスク）條約を締結して、爰で始めて國境線を決定し、爾來二百五十年間に十二の條約、界約協定が結ばれてゐるが、何れも一片の紙上協定に過ぎないものが多く、常に境界の不明確をめぐつて紛爭が絶へなかつた。滿洲國獨立以前に於ては尙更さうであつた。お互に是が自分の領分であると考へ、激しい紛爭が續けられて來たのである。

元來この國境條約は、ロシヤの東方侵略政策の重壓下に、支那が屈服と讓歩を餘儀なくされて締結されたものであるから、始めから無理がある。從つてロシヤ側では勝手に境界線を決めて、これは俺の領分だとする所も多いやうだ。所が滿洲國が獨立して、日滿共同で國防に當ると、今迄のやうにいゝ加減では濟さぬ。日本の軍隊がこれが滿洲領と信ずる所に、向ふが出て來れば、遠慮なしに打ち拂ふ。ソヴェットとしては、これは大分前と樣子が變つたといふ譯で、向ふも負けず劣らずそれに對抗する。しかし日本としては向ふが國境外に退却すれば、決して追擊はしないけれども、習慣的にソ軍が駐つてゐた方向に、日本軍が一歩でも入ると、向ふは盛に反擊する。この方が引けば向ふは、時として追ひかけては來る。かうして不法射擊事件が起るのである。これが日常繰返されて居る。兩國間に、漁業、石油その他いろ〳〵な懸案が、何れも停頓狀態にある際に、この國境問題で一層感情が尖鋭して來たことが事實で、この問題の發展如何によつて、戰爭の危險性がないとはいふへないのである。

三

それから外蒙と滿洲の國境問題である。これはまた露滿國境と全然趣を異にしてゐる。つまり

水草を追うて移轉する昔の時代と同じやうに、數十里に一つしかない井戸の爭ひである。この井戸一つが大きな問題になるのだから馬鹿には出來ない。國境は沙漠のやうな所で、素より判然として居らぬ。水のある所へ兩方から來るから、そこで衝突するのである。我々素人の考へとしては、沙漠のやうな所を五里や十里どつちへ行つても構はぬではないか、騒ぐ程の大した利害もないだらうから、いゝ加減に線を引張つて、無駄な戰を止めては如何だと考へるのであるが、外蒙古の問題は中々さうは簡單にゆかない。この井戸一つ讓れば、數十里退かぬと井戸がないといふことになるから、一寸では讓られない。井戸一つは一國一城を掛け合ふのだから、爰に問題の重要性があるのである。早い話は一つの井戸を讓ることになると、滿洲や日本は賴るに足らない。俺達はソヴェットへついた方は安心だと、內蒙古では騒ぐ。內蒙古は日本の對露戰略の上に於いて極めて重要な地位にあるのだから、これは井戸一つ位だからとて、簡單に負けては居られない。必ず勝たなければならない、重大問題である。

かくの如く、國境の爭ひが外蒙方面では亦一段と激しいのである。ソヴェットにとつては、外蒙は新疆と共に支那赤化戰の足場であり、東方經略上重要な地點にあるのであるから、井戸一つを讓ることは、この大政策に大きな反響が來るから、これを堅持して相讓らずといふ態度で、日本に向つて來る。井戸一つは直に双方の國策に關係する譯であるから、容易に讓らないのである。

これは國境紛爭事件を日露國交の上から見たのであるが、しかし、ソヴェットの軍備が充實して、此際叩けば直に日本が降參するだらうと見れば、決して遠慮しないでやつて來る。それ故に日本としては、ロシヤに乘ぜられぬやうにしなければならぬ。それには軍備を整へておいて、何時、事が起つても、不覺を取らぬやう豫めその準備と覺悟が必要であるといふことになる。

一〇、極東の爭覇戰と日本の決意

一

以上は東亞に於ける日本を中心とせる英米露三ケ國の外交關係を述べたのである。

日本は徒らに事を構ふことを欲しない。東洋平和の爲、亦日本の權益の擁護については、支那に對する特殊な關係に基き公正妥當な見地から、紛爭の原因となるべきものゝ除去につき、眞に胸襟を開いて談合すべく、凡ての外交々渉に委ねる方針をとつて來たのである。現にロシヤとの

國境問題に關しても、これが根本的に解決を期し、ソ聯邦及び外蒙政府に對し、國境劃定委員を組織し、國境を明白に劃定すべきことを提議してゐる。然るにソヴェット側は、國境は既に確定してゐるとの見解をとり、中々誠意を示さない。日滿兩國から再三再四嚴重なる抗議を持ち出すと、『紛爭を除く紛爭處理委員會を設けたゞけで充分だ』と、お茶を濁したやうな挨拶で馬鹿にしてかゝる、かくの如くロシヤ側の不誠意から徒らに今日まで解決を遷延させ、その間種々の不祥事が勃發して居るのである。

最近金廠溝事件の現地共同調査委員會の構成を始め、國境河川水路會議の復活、乃至は全面的國境劃定等の議が起つて、前途に多少曙光を見せてはゐるが、ソヴェット側が飽くまで禍根の除去に關知せず、却つてこれを他に利用せんとするような不誠意な態度に出て、中々捗りさうもない。眞に胸襟を開いて談合することは困難のやうである。國際政局が變化して、內外の情勢がソヴェット側に有利に變らざる限り、解決が出來ないといふのであれば、日本としても何時までも忍耐してゐる譯けには行かぬかも知れない。こゝにこの問題の前途に多事多難を想はせるものがあるのである。

二

英米との關係に於ても亦然りである。支那を中心に種々な未解決な問題が山積して居るが、日本側に誠意があつても何れも、腹に一物ある彼等は、徒らに時日を遷延させるのみで、禍根は一層擴大するばかりである。

歐米强强にして、日本を目指して攻め寄せて來るその目標は、日本が東洋に於て、獨占的優越地位を占めるといふことにあるのである。躍進日本が直に東洋平和を攪亂し、支那を蠶食するものゝ如く呼號し、且つ惡宣傳するのであるが、その內心はつまり自分の權益を擁護し、單に擁護に止らず何處までも自分の權益の主張を計りたい。所謂支那を帝國主義發展の對照として扱つてゆきたいそれには日本が邪魔物である。東洋から日本を叩き出さぬと、自分達の野望が遂げられないからそこで、日本を中傷するのである。日本は決して支那を獨占しようの、門戶を閉鎖して、勝手な振舞ひをしようといふ考へは毫も持つてゐないが、しかし日本の使命を遂行する上に、必要なる國策に就ては一歩も讓ることが出來ない。即ち東洋平和確保と、日本民族の生活權の爲に、東洋に於て就中、支那に於いて、政治的にも經濟的に最も優越した位置を占めるといふこと

は、誰が何んといつても讓ることが出來ない。それを列國が爭ふといふことであれば、必ず衝突が免れない。若し問題がたゞ損得の問題、或は利害の關係であるならば、所謂西洋人のいふギヴ・エンド・テーク『與へて而して取る』の筆法で互讓、妥協といふ途があるが、これは日本の使命遂行の關する所、亦死活の岐る問題であるから、互讓妥協ではゆかない。

三

極東の形勢は、かくの如く將に一觸即發の危機に直面してゐるのである。絶對に讓ることの出來ない『自國存立の立場』を堅持して頑張る日本と、支那を帝國主義の對照として發展する列國の帝國主義との對立は、渦卷く極東の爭覇戰として展開されたのである。

列國の包圍陣に喘ぐ日本は、これを克服するには、非常な決意と準備が要る。爰に兩々相讓らざる異つたものが對立する以上、情勢は好むと好まざるに係らず、一度は血生臭い風が、この極東の野に吹き捲つて來ることを覺悟しなければならぬ。

そこで我が日本は、この時局に處するに、非常な決意と準備を以て、視聽を大陸に向つて注いでゐるのである。軍事、政治、經濟等々の工作は、外交一元の形式を以て着々と進めてゐる。しかし、島國として海上に立脚して、國を爲してゐる我が日本は、單に大陸のみを切離して、國策が考へられないのである。地理的に大陸と太洋を踏み跨げなければ、自國存立の出來ない立場に置かれてゐるのである。

日本は恰も、太平洋を取り卷いてゐる國々の、丁度扇の要の如き、非常に優れた中心點に、しかも重要な位置を占めてゐるといふこの還境が、陸と海とを最大標的として關心を持たざるを得ないのである。これ即ち陸軍の唱へる大陸政策、海軍のいふ海洋發展策は、自ら事の表裏を爲すもので、國策二途に出て、チグハグになつてゐるものではない。互に密接不可分の關係を以て、進んでゐるものである。

これが滿洲事變以來、急激な變化を齎した極東に於ける、國際時局に處する我が日本の國策である。然らばこの國策が新規に編み出したものかといふにさうでない。歷史的に見れば、大陸政策は、邊隣の脅威を除く爲に、神功皇后の三韓征伐以來の傳統を持ち、海洋發展策は、倭寇の八幡大菩薩の旗風のことはさて置き、四百年以前、山田長政等南方問題に着眼した時、既に始つてゐる。日本の永い歷史の間に、時代の變遷によつて、この政策は、時には或は止み、或は進み、

幾多の曲折を經て來たが、列國の强力重壓下にある我が日本の國運打開の國策として、將にその收獲を見なければ、止まない勢を示してゐるのである。

新しい時局を控へて、この國策は何を標的として、動いてゐるか、蓋しこれは國民の重大なる關心事でなければならぬ。次にこの問題に觸れて見やう。

大陸政策と海洋發展の內容

一、强化され行く我が大陸政策

一

先づ大陸政策から始める。

齋藤內閣時代に五相會議（首相、藏相、外相、陸相、海相）といふものがあつた。廣田內閣に至つて首相、藏相が加はらないで、三相會議が出來て、所謂國策を練つてゐる。何れも外交の一

元的强化が表面の目標であるが、實質的に大陸政策の實行を標識としてゐるのである。この會議の覘ひ所は事變以來確立された滿洲國助成政策を基調として、これに對支對露問題を加へた所謂大陸政策がその第一である。同時にワシントン海軍條約廢棄以後の太平洋政策も包含して、この大陸、太洋政兩策の調和的併進が目論まれてゐるのである。世にいふ大陸政策はこの意味に外ならぬ。が爰に差し當り問題になるのは、滿洲國と冀東政權の地帶、更に竿頭一歩を進めて宋哲元の冀察政務委員會に屬する廣大な地域をも包含せんとするのである。

かくして日滿支の所謂經濟ブロックを結成して、『相互に唇齒輔車的關係を協定し、共同防共はもとより、各々の國民ば相互間の融和一致を計り、以て東洋平和の確保を期す。』といふのがその針路であるやうだ。

二

そこで、日本のこの大陸政策はどこまで發展してゐるかといふへば、殷汝耕氏を首班とする冀東政權との間には、既に去る四月中旬滿洲國政府との間に、修好協定締結の準備に入り、即時軍事、經濟、交通の各部に亘る起草準備委員會を組織した。この問題については發表禁止事項が多

いので、自由に語ることが出來ないが、協定の內容は、（一）越境關稅の減免、（二）兩國人國者手續きの調整、（三）共同防共、（四）交通連絡等の問題で、これは既に調印濟みになつてゐる。その外に治外法權の撤廢問題、日滿冀の關稅協定、交際機關の整備等が殘つてゐる。かくして着々と大陸政策の實現に取りかゝつて居るが、所がこの冀東自治政府に關する限りは、蔣介石から完全に隔離されてはゐるが、肝腎の資源としても、市場としても大きな期待は持てないのである。この地は我が九州程度の大いさ、白河から長城に及び小さな地域で、東に海を控へ、塘沽を中心にかたまつてゐるが、農產物、鑛產物、水產物等、僅かな資源をもつてゐるに過ぎないので、こゝは經濟的關係よりも、寧ろ政治的に重要視すべき意義を有するものと思ふ。問題はこゝを中心に竿頭一步を進めて、宋哲元の冀察政務委員會をブロック經濟の下に、果して入れられるかどうかにかゝつてゐるのである。

三

所がこの政權も最近急速に旗幟を鮮明にして來たが、既に宋哲元と我が當路者との往復が重ねられてゐるやうだ。この所は河北からチヤハルに亘る廣大な地域を占めてゐるが、果して實質的には南京政府と手が切れてゐるかどうか。表面は自治を標榜してゐるが、政務委員の顏觸れを見ても、蔣介石、張學良系の人物と、毒にも藥にもならぬ老朽官僚を網羅して、特に親日的な匂ひもない。宋哲元委員長その者が斷然親日派だなどゝいふ人もあるが、實は日本と南京政府とを兩天秤にかけた一策士と見るのが妥當であらう。

ともあれ、日本の大陸政策は、何をさて置いてもこの冀察政務委員會を入れることを考へなければならぬ。爰に日本がソヴェットの共產主義東漸勢力を拒き、一方亦對露軍略の上から見ても、極めて重要性を持つのである。

內蒙古と滿洲との重要なる關係は、國防上の見地に立つて、日本の大陸政策の下にその勢力範圍に置かうとしてゐるのである。若し內蒙古が外蒙古の勢力下におかれ、ソヴェット勢力の下に包含されたならば、滿洲國の國防は非常な危險にさらされると同樣に、この北支方面を日本の勢力下におくかどうかといふことは、經濟的利用の問題が含まれてゐるだけに、寧ろ經濟的に無價値な內蒙古以上に重要性があるのである。

滿洲國の助成發達の意味からいふつても、東洋平和の確保といふ大きな理想の上からいふつても、宋哲元の翼東自治政府を日本の勢力下に置かなければ、日本の大陸政策が意味をなさない。また一朝、日ソ開戰といふが如き事態となつた場合、內蒙古と同樣に、この北支一帶が日本の勢力下にあるかどうかによつて、作戰上容易ならぬ關係を生ずることは說明の要もあるまい。內蒙古と共に北支那一帶が、我が勢力下に團結固く包含されるに至れば、これによつてソヴェットの極東作戰を非常に困難ならしめることも、又その地理的關係から容易に考へ得られる所である。

以上の如き意味から、大陸政策としての對照される北支那一帶は、內蒙古の問題と同じく、決して無關心ではゐられない。どうしてもソヴェットの進出を封殺するだけの姿勢に、早くこの問題を持つてゆかねばならぬ必要が生じてゐる。これに對しては、當局者は相當重要な注意を拂ひ種々なる手段を講じつゝあるが、その內容を具體的に開陳する自由がないのは、甚だ遺憾である。

二、北支の經濟的利用の意義

一

對滿不動の國策樹立の問題を中心に、日支關係の確立による三國關係の整調が如何に當面の問題になつて居るか。これは政治外交、並に國防上から見て、重要なることはいふまでもないが、更に重要なる問題として、叫ばれる根據は、謂ふまでもなく經濟利用の價値問題にある。一體、北支に如何なる資源が開發されるかを前提として、この問題を取扱ふと、二つに分析して考へられる。その一つは、資源開發利用による國民經濟力の充實と、我が工業原料の確保、その一つは邦品輸出市場の强化、これである。

爰に、この二つの問題を檢討するに當り、吾々の考ふべき問題は、先づ投資を旺んにすべきことである。現に滿洲に對しては、昭和七年から十年までの間に、我が國より投下された資金は、八億二千七百萬圓餘を算へてゐるが、しかし滿洲の經濟建設は、この負擔を償つて餘りある程の收獲を齎してゐるかといへばさうでない。幸にこの期間の我が對滿貿易は五億圓餘の大出超であつた爲、資金の流出もさまで問題にされずに濟んだが、何時までも金と物とが適當の交流關係を維持してくれるとは斷定しかねる。

そこで北支が一枚加はつて、日滿ブロックから極東アウタルキー時代を建設しなければならぬ

といふことになる。これが經濟的に見た大陸政策の肝腎なところである。

二

成程、近頃對滿貿易の輸出額は增大してゐる。北支方面に於ても、日本の政治的勢力の劃定によつて、滿洲同樣貿易の增大を見ることが出來るには相違ないが、それは投資の還流による貿易の增大から、進んで、所要產業の資源の供給による貿易關係に立直さなければならないのだ。政策として重要性は、茲にある。然らざれば我が所要產業の目的も、國防上必要な資源問題の解決も出來ない。從つて輸出市場の强化、移民の進出が期せられないのである。

滿洲及び北支那の經濟關係を、將來こゝまで結び付けなければ、大陸政策は單に形骸のみに終る惧れがある。換言すると、北支經濟の利用價値の問題が、かくして始めて解決が出來るのである。

吾々はこの前提の下に、北支經濟資源問題に觸れて見やう。先づ第一は棉花である。これは中華綿業統計會の見積によると、河北一省の棉花作地は七、四〇〇千畝、その產額二、二〇〇千ピルコと稱せられ、勿論我が消費を充たすには素より不十分であり、且つ品質も適品とはいへないが

これは指導次第でモノになる可能性があり、尠くとも滿洲國より有望だとのことだ。第二は羊毛である。現在河北に百三十萬頭の緬羊があり、この地方が牡羊の適地であることは明らかである併し、このまゝ日本の需要に應ぜられるかといふとさうではない。濠洲の逸種を輸入して、改良を加へる必要がある。さうすれば强ち棄てたものでもない。他には見るべき資源があるかといふへば、先づ重視されるのは石炭の問題である。

この石炭は河北省の石炭埋藏量は三十億噸、年產七百萬噸は確實であると稱せられて居る。品質は九州や北海道の瀝青炭種より遙かによく、殊に製鐵事業には適品であるとの事。たゞ面倒なことは、現在外國資本が單獨又は合辨の形で根を卸してゐることである。これ等の外國資本をどう扱ふかゞ將來の問題であるが、開灤、門門道溝等に根を張つた英國資本は、最近日本への賣却を決意したなど傳へられてゐるが、その退却振りは見ものであらう。

更に鐵鑛については　縣、臨榆、易縣、井陘等の省內各地に豐富な資源がある。灤縣の如きは正確量千百萬噸推算量三千三百萬噸の多きに上つて居るが、石炭のやうに利用されてゐないので、凡て睡眠資源に過ぎないのである。

三

以上によると、棉花、羊毛、石炭、鐵鑛等は重なる資源であるが、差し當つて直ちに利用の出來るものが、單に石炭位のものである。支那は昔から『地大物博』となどゝいつて、世間の人が漠然と支那を考へて居る。恰もコロンブスが黄金の甍、白金の柱を以て家を造る日本を想像したが如き誤りを一部の日本人の中で、支那に對して有してゐるのではないか。成程支那には相當豊富なる各種資源を包有して居るだらう。何しろ三百萬平方マイルにも垂んとする廣大な平原國であるから、精確な調整はないとしても、資源なしとはいふへない。しかし、折角の資源も直ちに利用の出來るものは、石炭だけで、その以外は凡て睡眠資源である。これを利用價値付けるには莫大なる資本と科學の力を加へられなければ、全く用を爲さない。これは北支方面に於ける實相である。然るにこの事實を忘れて、慢然と過大視しては當が外れる。支那の資源は、何れも資本と技術の先行を不可缺としてゐる事實を知らなければならないのである。

昨年から頻りに傳へられた、北支の經濟工作は、もと〳〵何を期待し、如何なる方策に據らんとするか、一般に全然判明しては居ない。併し、飛躍日本の實現が、首尾一貫せる大陸政策に對する百年の長計を必要とするのである。從つてこれに對する態度なり、政策なりの一定せる方針が決ることが勿論であるが、日本の大陸政策による日支の緊密なる關係の持續は、經濟資源に關する限り、我が國は進んで、これに援助を與へ、その効果の來るを永い眼で待つ。この覺悟が必要である。

四

次に邦品輸出市場の强化の問題である。日本商品市場としての北支、殊に河北は滿洲同樣に大きい期待をもてゐ。周知の通りこの地方は、農業地で農民は全省民の九割弱を占めて居る。所がこの地方の土地は、大部分は不耕地主によつて占められて居るのである。現在では全耕地の六割がそれである。家族所有地、共同體所有地と稱する地域に細々と自作經營をやつてゐるものもあるが、實は土地が借金の擔保となつて居るので、窮迫の度に於て小作農奴と少しも變らない。加ふるに、河北農民の平均耕他面積は、大部分三十畝以下で、これが全體の六割を占めてゐる恐ろしい小農制である。農具も家畜も大部分借物である。かうした機械的缺陷の外に、洪水や凶作が相次いで襲起してゐるやうな始末で、流離の河北農民が滿洲國へ移住する事實に徴しても、この

地方の生活者は想像に餘りあると思ふ。市場問題に關しては、棚からぼた餅式のことを考へることは、現實の問題として、必ず失望することになる。

次に北支方面が日本商品の市場として、どれだけの發展力をもつかの問題である。これも亦將來に屬する問題で、支那國民の經濟力が極度の疲弊に沈淪せる現狀の下に於ては、今直ちに邦品の進出は急速にはこれを期待し得られないのは勿論の事である。彼等は太古そのまゝ『井を鑿つて呑み、回を耕して食ふ』自給自足民で、資本主義經濟のハカリにかゝるものではない。富が年々南漸して、北支には購賣力のない貧農だけが、とり殘されてゐるのだから、その發展力も疑問といふはさるを得ない。

我が國がこの地方に新しい資本を投じ、資源を開發すれば、例によつて經濟建設の初期こそ、建設財を中心に相當の輸出があるであらう。併し消費財の方は多く期待出來ない。建設が一段落をつげた時、全面的に輸出の激減となることを覺悟せねばならぬ。

五

要するに以上を約言すれば、一部の人々が唯慢然と考へてゐる如き資源國とは餘りにも徑庭が存することが判る。假りに我が國がその大陸政策の一端を顯現して、北支一帶にある程度の政治力を自由に行使し得る如き狀態が成立しても、それによつて我が國は直ちに何等かの意味に於ける經濟上の利益を得ることは、餘りにも至難事である。我が國の要求に合致する狀態を出現せしむる爲には、先づ開發の基礎構築に相當長期に亘る犧牲を拂はなければならぬ。

かやうな經濟事情からすれば、我が國が日滿ブロックの不備を補ひ、東亞經濟の安定を計らんとするに際しては、一足飛びに重工業的開發を考ふるより、まづ支那は前述の如く、自給自足の出來ない慘めな農業國であるから――米、小麥、穀粉、砂糖等の食糧品だけでも、年々輸入總額の二割に及ぶ巨額を外國より仰ぐ一事によつても、何を差し置いても農業改良に援助を與へなければならぬ。この農業を通じて民力を培養し、順次資源の開拓利用に進む方途を採るべきであらうと思ふ。

それには前述の如く、相當長期に亘つて、我が國より各種型態の出費繼續を覺悟し、豫め準備工作をなすにあらざれば、日滿支の經濟ブロックを以て我が產業、國防强化の目的を達することが出來ない。然らざれば恐らく思はざる失敗を招く惧れなしとはいふへないのである。恐らく我

が當路者はこの方針によつて、着々工作を進めてゐることゝ思ふ。

三、大陸政策の歴史的背景

一

大陸政策は今の處經濟問題よりも、寧ろ政治問題に重きを置いて發展すべきである。日本の政治的活動の自由が保障され、次に來るものは經濟問題でなければならぬ。

惟ふに日本の大陸政策は、單なる權益といふやうな問題から出發してゐるのではない。滿洲事變に際し、我が外務省が國際聯盟及び列國に對し辯明せる所は『既得權の擁護及び自衛權の發動に過ぎず』といひ、專ら自國の利益を主張するにあつたが、こんな生溫い問題ではない。もつともつと深刻な、しかも切實な日本の國際的要求は、滿洲事變となり、次て北支方面を包含した大陸政策となつて顯はれて來たのである。その關係は英國のエヂプトや印度に於ける地位、亦米國の中米地方に於ける、佛蘭西のモロッコに於けるが如きもの以上に、もつと大きな關係を有するのである。これは政略的なものでなく、實に我が國の消長に關する問題であつて、自己保存といふ生命に關する本能に基く切實なる死活問題である。若し日本のこの大陸政策に妨害する者があれば、日本が、假令焦土と化しても全世界をも相手に取つて爭ふことを辭せない覺悟がある。極東に於ける新たなる國際情勢は、益々日本をしてこの覺悟を爲さしめたのである。

二

日本の極東に對する立場は、全く死活的な過去の歴史的背景はよくこれを物語つてゐるのである。殊に日清、日露兩戰役の意義、次て日、支、露の三角關係、列國の强力壓迫の關係を見れば成程日本のこの國策の確立並にその覺悟の程は、若し心あれば如何なる國と雖、無條件に承認するだらう。

我が日本は、古來常に北方からの脅威を受け、これに大いに惱まされて來たのである。日本は敢て極東に對し領土的野心などは寸毫も抱くものではないが、この危機を避ける爲に、幾度も血と泪の犧牲を拂つて、その安固を期したのである。近くば日清、日露の兩役は云ふまでもなく、古く歴史に遡つて見れば、須佐之男命の朝鮮を經營せる、神功皇后の三韓を征伐せる、齊明天皇の百濟を救援せる豐臣秀吉の朝鮮征伐を企てたこと、西鄕隆盛の征韓論の如き、何れも北方から

の脅威を除き、切迫せる危機を避けんが爲であつた。しかも猶今日列國帝國主義の不當なる侵略に惱まされてゐるのである。その國際的情勢は、益々複雜化し、愈々大規模となり、將に日本の危機目睫に追りつゝあることは、叙上の通りである。爰に日本の大陸政策の意義があるのであつて、實に三千年來の傳統的國策であるといふはなければならぬ。この歴史的背景と現實の國際情勢から見れば、權益擁護などの單純な問題でなく、その關係は英米の如き政略的な意味でなく、生命線の劃定にあることは、敢て贅言を要せざる所である。

三

要するに以上を約言するに、第一は地理的及歴史的理由。第二は國防上の必要。第三は經濟的要求——これを總括したものである。新しい問題としては、前に述べた如く、極東の新情勢により、滿洲國の助成政策を基調とし、更に海洋發展問題と調和的に併進する意味も無論含まれて居るが、根幹とする所は以上の三つの理由に外ならないのである。

この政策の目的は、日本は邊鱗の平和を確保し、常に他國の脅威を受け る事。更に經濟的平和施設によつて、不毛の土地を開き、眠れる資源を活かすことによつて、支那の幸福を增進すると共に、我が產業及び國防强化の目的を達するにあることは前節で述べた通りである。

これ大陸政策は、日本の生命線の劃定にある所以は爰にあるのである。元來、この國家生存權は多方面から觀察することが出來るが、就中、國民の死生を制するものは、國防關係と經濟關係等とにある。先づ國防關係より見れば、ソヴェット・ロシヤに對する防備、その他列國と一朝事を構えた場合に於ける物資供給の問題である。將來の戰爭が國民經濟の問題と離すべからざる密接な關係にあり、生活品の自給自足と兵器彈藥、その他軍需品に、事缺かざるだけの經濟ブロックがなくては持久し得ないことは論ずるまでもない。この意味に於いて國防關係と經濟關係とは、その內容を一にしてゐるものであつて、即ち日本の大陸政策は、國家生存權の問題として絕對的意義を帶ぶものである。

四

更に謂ふなれば、北支方面の秩序の安定と、資源の開發は、滿洲國助成の唯一の途であり、將來日本の生存を保障する國家的防禦の第一線でなければならない。支那それ自身が、完全なる國家の統制と國防を有するならば、日本は好んで北支方面に多大の犧牲を負擔する必要もないので

あるが、不幸にして支那が自國の領域と秩序とを保全することさえ出來ない狀態にある。それでは日本の安全も東洋の平和保障もこれを支那に求めることが出來ない。かるが故に日本は北支方面に政治上經濟上いろ〳〵な計畫をしなければならぬことになる。蓋し當然の歸結なりといふべきである。

四、海洋發展策の重大義

一

日本の大陸政策は、ワシントン海軍條約廢棄以後の太平洋政策も包含して、この大陸と太洋の兩政策の調和的併進が目論まれて居ることを前に述べて置いたが、次にこの問題に觸れて見やうと思ふ。

太平洋政策とは何かといふへば、二つの意義がある。その一つは相迫る英、米、露の海軍力に對處して、日本は所謂『鐵壁海軍』を强調すべきこと。その二つは經濟的に見た海洋の發展問題である。

平易にいふと日本のやうな海上に立脚して居る國としては、海洋發展は當然過ぎる程、當然である。然るに滿洲事變以來國民の視聽が總て大陸に向つて居る。島國として本來の仕事である海洋發展を忘れてゐるのでは、思はざる失敗を招く、活眼を開いて島帝國の將來を考へぬと、思はざる間違ひを起す。かういふ趣意で海洋發展といふことが、最近事新しく叫ばれるに至つたのである。

二

日本には固有の弱點がある。即ち土地が狹い所に、人口が多過ぎる。その上資源に乏しいといふ三つの弱點がある。この弱點は日、滿、支の經濟ブロックで救はれるかといふに、中々さうはゆかない。この事は滿洲並に北支方面に於ける經濟資源の關係の所で、詳細述べた如く、忌憚なくいふと、日滿支の經濟ブロックだけでは、遠い將來はいざ知らず、現在『日本の自給自足の確立と、國力の積極的發展工作』は六ケ敷しい。今までの調査の結果によれば、現在必要缺くべからざる油がない。我最大の產業たる綿工業の原料たる綿も滿洲にはない。北支方面にはあつてもこれは科學と資本の力で改良しないと、直に日本に持つて來られない。それには永い歲月がかゝ

る。それから毛織物の原料たるべき羊毛も亦さうである。差し當り目前の急に急ずる資源は、石炭以外に何物もない。この石炭でも外國資本が關係して、早速日本の物にすることが六ケ敷しい。何れも眠れる資源であるから、日滿支經濟ブロックを作つたからとて、直に資源の缺乏が一氣に救はれる譯はない。亦日本の人口が幾らでも移されるかといふと、移民事業といふことは非常に六ケ敷しい問題であつて、中々五年や十年で成功はしない。殊に支那人の如く生活程度の低い者と、日本人とが一緒になつて競爭すれば必ず負ける。故に支那人がゐない地域に集團的に移し、日本の社會組織その儘で持つてゆくなら成功が出來るが、斯やうな計畫は夢物語りに過ぎない。果して然らば人口問題の解決も困難であるといはなければならぬ。

三

大陸政策の一本槍では、日本の產業及び國防の目的が達せられてないとすれば、如何にしてこの弱點を救ひ、これを解決するかといふことになる。これが海洋發展の喧ましい所以である。

眼を轉じて南の方を見る。ボルネオ、スマトラは有名な油の產地である。その他の蘭領諸島からも油が出る。綿は熱帶だから栽培すれば幾らでも出來る。羊毛は蘭領印度には無いけれども一

足延せば濠洲は本場である。その他鐵、石炭、木材、ゴム、或はボウキサイド、錫等後段で述べる今日の日本に於ける各種工業に必要な原料は、殆んど一つとして得られないものはない。

臺灣を中心として約二千哩の圈を描いて見ると、マレイ半島から蘭領印度、ニューギニア、ヒリッピン皆此の圈に入る。亦南洋群島のパラオを中心として二千哩を描けば、濠洲もその圈內にある。此の二千哩の圈內の物資を日本が利用することが出來れば、日本の叙述の弱點は立ち所に救はれるのである。

そこで海洋發展といふことは、今日の場合、大陸政策を遂行する上に於いてその榮養線を培養する意味である。それ故に滿洲及び北支の問題と、海洋發展といふことは、結局同じ目的に歸一するので、一つはその表であり、一つはその裏であつて、密接不可分のものである。世間では陸軍は大陸政策といひ、海軍は海洋發展といふ。同じ日本でありながら、二兎を追うてどうなるか國策の不統一を攻め、且つ不審を懷く者もあるが、要するに海洋發展の成否如何の問題が、直ちに大陸政策の消長に關係を及ぼすのである。從つて兩者の調和的併進することに於て、初めて愛に眞の綜合國防力の强化を期し得らるゝものと信ずるのである。

四

日本の海洋發展問題につき、吾々の考へなければならぬ問題は、海運の道程のことである。海運の道程が長くなればなる程、一朝事ある時、非常に厄介で、これを守ることは容易ならざる事である。今云つたやうに二千哩の範圍内で何でも、物資が辨するといふことは、日本としては非常な天惠である。若しこれが米國から綿を買ふ、濠洲から羊毛を買ふ、歐羅巴から何を買ふといふやうに、世界中から物資を集めなければ、生活が出來ないといふことになると、非常な弱點でなければならぬ。この點日本は、八千哩のブラジルより鐵鑛を求めんとする獨逸、棉花を印度及び米國より求め、羊毛を濠洲より移入する英國等に比して、遙かに安全確實であつて、經濟的な利點を有するものといふことが出來る。日本は今までこの天惠を十分に利用しなかつたことが、既に間違つて居つたのである。

所が和蘭が、日本の海洋發展策に付き、猜疑の目を以て、近頃警戒を嚴にするやうであるが、この方面に日本としては政治的野心がある譯けではない。只だ資源が乏しいといふ經濟的弱點を匡救したい以外に他意はない。日本から資本と技術と勞力を提供し、蘭領印度からその土地と資源とを出して貰ひさへすれば、其處に立派な企業が出來る。そしてこれを以て共存共榮の方途を講ずる以外に何等の野心もない。日和兩國の經濟提携こそ、先づ海洋發展の第一歩であらうと思ふ。

五、南洋に於ける列國の對日包圍陣

一

日本人は既に四百年前海洋に發展して、南方問題に着眼した。山田長政初め一萬以上の先覺者は、海外各地に颯爽たる進出を試み、當時既に南洋方面には大部落を作り、城塞を築くものすらあつたのである。流石の猛者プリタニーの海賊船も、我が八幡大菩薩の旗風には、怖をなしたものであつたが、不幸にして德川幕府の鎖國政策の爲に孤立無援に陷り、遂に和蘭人、英國人の排擊に遇つて、空しく雄圖が挫折して、屍を萬里の異鄉に晒らすに至つた。

以後南洋諸國は悉く英、蘭、佛、米等の白人諸國に占領され、爰に全く日本の勢力が、踏蔭もなく沒せられたのである。

然るに三四十年前から、再び邦人の南進熱は芽を吹き、識者亦盛に南進策を叫ぶに至つた。時既に、英、蘭、佛、米等の植民地として、併合された南洋は、最早邦人の進出の餘地がなく、凡ゆる障害の爲發展を阻まれたるに拘らず、その企業は英蘭人に伍して、次第に地歩を固めつゝある。フイリツピン、新嘉坡、ジヤバ、セレベス、裏南洋、北濠洲等に散在する數千の日本人墓標は、過去四十年に進出奮闘した尊き人柱である。かくて南洋の發展は、大陸政策と共に昭和新時代の吾等日本人に課せられた重大使命となつたのである。

二

所が果して日本人のこの量大使命を遂行するに恙なくやつてゆけるかといふと、愛にも亦列國の對日包圍陣の十字火に逢つて、その試練に堪へ得るや否やの重大なる事態に直面して居るのである。

南洋の土着民の中でも進歩的な人々は、東亞に於ける安定勢力である日本の地位を理解して、その援助によつて彼等の解放を望んで居るのである。然るに亞細亞人の亞細亞を目指して起ち上らうとしつゝある南洋被壓迫民族が、自覺すればする程、南洋を搾取の對象とせる英國、和蘭の眼が光るのである。かやうな譯けで、日本の躍進ぶりは、今では却つて列國の視線を甚しく刺戟するに至つた。

即ち印度に無限の寶庫を有する英國にとつて、シヤムの親日的傾向は憂慮に値ひすることであり、フイリツピンに東洋艦隊の根據地を有する米國にとつて、獨立後の比島に於ける日本人の發展は一つの脅威であると見てゐる。されば英國は和蘭を煽動して、蘭領印度より日本品を驅逐することを策し、フイリツピン亦米國の希望を容れて、マニラ麻、木材からの日本人の退却を企てたのである。かくして彼等は、全力を擧げて日本品及び日本人の南洋進出を阻止するべく策謀を廻らしてゐるのである。

これは、謂ふ所の日本の海洋發展問題に對する一大障害である。日本が果して列國のこの包圍陣を如何にして切り拔くか。非常時日本に課せられた命題でなければならぬ。

南洋方面は實に、我が帝國存立の本舞臺であつて、日本を繞る西太平洋の各種情勢は、寸時も注意を怠ることの出來ない緊切な問題である。然るに叙上の如く、列國の勢力が相錯綜して、頗る複雜を極め、荐りに暗雲低迷、異狀ありの印象を與へてゐるのである。

六、經濟的に見た南洋

一

南洋に於ける日本の國際關係は、かくの如く列國の包圍陣に捲き込まれ、全く孤立の狀態にあるが、それにも拘らず、日本商品の南洋進出には最近實に目覺しいものがあり、更に益々南洋が我が日本にとつて頗る重大性を加へつゝある。

昭和十年度の我が南洋貿易を見ると、その輸出總額は二億七千九百八十九萬圓、輸入總額は一億四千八百廿四萬圓で、六年度との比較を示せば、次の通りである。（單位千圓、×印入超）

△昭和六年	輸出	輸入	差引出超	〈昭和十年	輸出	輸入	差引出超
英領植民地	一九、一三〇	二一、八五八	× 二、七二八	英領植民地	四八、五三六	四〇、六四八	七、八八八
蘭領東印度	六三、四五〇	四六、〇八二	一七、三六五	蘭領東印度	一四三、〇四一	七八、一八七	六四、八五四
フイリツピン	三〇、四三五	八、六八八	二一、四四七	フイリツピン	四八、〇五八	三三、九四九	二四、一〇九
シヤム	四、四七三	六、七九二	× 二、〇二三	シヤム	四〇、三五八	五、四五八	三四、八〇〇

即ち六年と十年を比較すれば、英領植民地に對する輸出は二倍半、蘭領東印度に對しては三倍三分の一、フイリツピンに對しては二倍四分の三、シヤムに對しては實に八倍の激增を示して居るのである。而して六年度の出超額二千四百萬圓に對し、十年度は約五倍半の一億三千百六十五圓に上る狀況にある。

かゝる輸出の躍進は、主として圓爲替安によるものであるが、亦新市場を求めてやまない日本産業の發展に負ふ所が多いのである。その結果は一面英、米、蘭等の本國産業の不振の招來を意味し、其處亦何等の風波無きを得ないのは當然の歸結といはなければならぬ。

二

商品市場としての南洋は、以上の如く我が國にとつて、極めて重要なる關係にあるが、原料資源地としての南洋も、亦閑却することが出來ないのである。吾が國への輸入品は米、砂糖、ゴム、麻、タピオカ、石油、パルプ、鐵鑛、錫、木材等、食糧及び工業原料品で、何れも我が産業發展の基礎を成すものばかりである。

現在我が貿易の進出ぶりを見て、世界は別に亦『平和的黃禍』を主張する位だから、その勢の

凄まじき、我れながら驚くものがある。現に實際の數字を見るに、一九二八年以來の日本を除く諸外國全部の海外輸出高は、三分の二の減少を示してゐるに拘らず、日本は量に於て、百%の增加を示し、金額にすれば六%以上の增加を見るに至つた。現に紡績王國といふはれた英國の紡績職工の如き、日本製メリヤスシヤツを着、日本製靴下を穿つてゐることなどは、有名な事實だが、この事は一面豊富な南洋の資源を無視することが出來ない。その原料たる棉花の輸入、七億三千萬圓に達し、我が國紡績の發達を促してゐるが、その棉も、米國棉の四億、印度棉が二億五千二百萬圓に比すれば、蘭領印度より五十七萬八千圓、佛領印度より十六萬圓の輸入が、小量に過ぎないが、南洋では甘蔗の世界的不況から、甘蔗畑が棉花畑に轉向せんとし、將來の大量生産が漸く有望さるに至つた。南洋棉は印棉、米棉に代る日も、遠からぬものと豫想されてゐる。

それから羊毛である。その輸入高は一億八千六百五十萬圓、中一億五千九百萬圓は濠洲より求めてゐるが、既に南洋方面にも産出されるに至らんとする趨向を見逃してはならぬ。毛織物は歐米のものに決つてゐたものは、今では却つてこれが日本の工業となつて、逆に歐洲に輸出してゐるやうな現狀である。既に濠洲と通商を絶縁してゐる日本にとつては、南洋の羊毛は極めて重要視すべきで、ニューギニア高原地帶は、緬羊の養飼に適するといはれてゐる。

鐵鑛石はその輸入二千七百萬圓中、馬來半島、英印方面より一千百十萬圓、支那より六百八十萬圓であるが、他に洗鐵三千六百萬圓（過半は滿洲）と、鐵一億四千五百萬圓（米國より古鐵六千七百萬圓）の輸入あるも、將來洗鐵及び鐵は、滿洲よりのものは別として、南洋産支那産の鐵石を用ひ、國内に於て精練加工するの必要がある。

石炭の輸入四千七百萬圓中、三千萬圓以上は撫順炭であるが、七百萬圓强が、佛領安南のホンゲイ炭である。ホンゲイ炭が日本の製鐵業に必要なることはいふまでもない。

石油の輸入は三千三百三十六萬圓、蘭領印度よりのもの千八百四十萬圓で、年額六百噸を産し尙他の島々にも有望なる埋藏が確認されてゐる。現に蘭領ボルネオ東岸では三井、日石協同で資本二百萬圓の日蘭合併ボルネオ石油會社を設立して、六井の試掘中で、南洋の石油は益々有望視されてゐる。

錫の輸入は千五百三十三萬圓、島來半島から來るもの、千萬圓を越へてゐる。近來邦人企業家にして、これ等錫鑛山事業に進出せんとするもの漸く現はれ、現に島來半島トレンガヌ王國に於

て、石原産業海運會社は、鑛區四千五百英反を入手し、企業計畫中である。

生護謨は、世界の謨護栽培面積八百四萬五千英反中、約八百萬反は南洋にあり、日本の輸入五千七百萬圓中、南洋から五千二百萬圓の輸入になつてゐる。

パルプ製紙用材料は、樺太産の外四千四百萬圓輸入してゐる。主として北米、諸威の木材であるが、他の纖維植物の輸入二千七百萬圓の内、南洋から特種紙及び上等人絹用として、千五百萬圓の麻類が輸入されてゐる。日本人絹の發達は南洋麻の需要激增を促すに極つてゐるが、これ等の麻は比島南半、セレベス、ボルイオ、シヤム等の無閼地帶が好適であるから、將來が待望されてゐる。尙臺灣の鬼萱、内南洋のオオハマボラは、將來喬木性パルプに代るべき年生植物として囑目されてゐる。

ボーキサイド、これは我が國には、良質アルミニウム鑛がないので、年々千二百五十萬圓輸入してゐるのは、國防上の關心事だ。目下、日本アルミ會社は蘭領ビンタン島からボーキサイドを輸入し、臺灣水電で五千噸のアルミナを造る計畫をし、我が南洋でも、ボナベ、パラオ、メツブに良質ボーキサイドが發見され、三井で採掘計畫中である。今我が國では朝鮮、滿洲の原料を使

用してゐるが、パラオのものが一頭地をぬいてゐる。

食糧品、我が國生産品の不足は、日滿ブロツクで間に合はぬ場合は、暹羅の米を始めとして、凡て南方から確實に得られる。

その他、輸出用建築裝飾木材の原料たるべきベニヤ板や高級品などは南洋材で、飛行機の潤滑油たる胡麻油は、蘭領印度及び我が内南洋から來てゐる。砂糖は臺灣及び南洋産たるは云迄もない。政府はこの頃、海運六百萬噸計畫を立て、更に本年の臨時議會では臺灣拓殖法案、航路統制法案を議決して、現に南洋拓殖會社が活動してゐる。既にこの情勢である。我が邦の當然採るべき方針は、自ら明瞭でなければならぬ。

三

かくの如く、我が國工業原料及び國防必需品は、大部分南洋より輸入を仰いでゐるが、現在我が國の貿易は、更にその工業力によつて、これを製品化し、海外輸出を以て、國力の躍進を圖りつゝある事實から見て、南洋が極めて重要なる地位にあることはいふまでもないのである。

七、資本投下市場としての南洋

一

原料資源としての南洋は、我が國防、産業の上に於て極めて重要なる關係にあり、將來益々日本の發展性が約束されてゐる。この情勢からして、無限の寶庫、開發されざる廣漠たる無人の處女地に、日本の資本が躍進して、所謂海洋發展の基礎を築くことは、當然の歸結でなければならぬ。

南洋の全面積三百八十萬平方粁、これは佛領印度支那も加へたものであるが、この内、開發されてゐる部分は、約六%で、殘りの九四%は、森林とジヤングルと平野に放棄されてゐる。しかもこの廣大なる面積に人口一億一千萬餘、その稀薄なるに驚かざるを得ない。

日本が重輕工業國として、將來の大發展を見るとせば、この南洋に於ける無盡藏の鑛物と、永遠の供給力を有する資源にある。況んや製品の販路に惠まれてゐる點から見て、斷じて南洋を見逃すことが出來ないのである。然らば世界の注視してゐる南洋に對し、どれだけの資本が投下されてゐるかといふと甚だ小許で、これではまだ〳〵必需原料の入手が覺束ない。歐米の大工業國が、次第に原料供給の將來性を失はんとしつゝあり、最近南洋の寶庫に世界の眼が注がれてゐる事實から推して、將來南洋を繞る國際資本戰が、愈々深刻な局面を展開されるものと思はれる。

二

この點日本が、叙述の如く、海洋たるの天惠によりて、平均二千浬以内に過ぎざる海外原産地の資源を容易に利用し得る狀態にあり、現在列國の投下資本に比較して、極めて微々たるものであつても、將來遙かに彼等を凌駕する經濟的利點を有するものといふはなければならぬ。海洋日本としてとるべき當面の急務は、蓋し、南洋の開發以外に見るべきものがないのである。

試みに列國の投資狀況を示せば、次の如し。

南洋に於ける列國の投資額（圓換算）

	日本	蘭	英國	米國	總計
石油	三〇〇、〇〇〇	一九八、七四〇、〇〇〇	九八、八八八、〇〇〇	三〇、〇〇〇、〇〇〇	三七、六三〇、〇〇〇

鑛物	石炭	—	—	—	三四、一九五、〇〇〇	一、七四五、五〇〇、〇〇〇	一、九一七、九〇一、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇、〇〇〇	四、九八七、八三一、〇〇〇
	錫	—	—	—	二九、六六〇、〇〇〇				
	金銀	—	—	—	一五、八三一、二〇〇				
	鐵	四、〇〇〇、〇〇〇	—	—	—				
	其他	—	—	—	一四、三四九、六〇〇				
	計	四、〇〇〇、〇〇〇	二七八、八七一、〇〇〇	二〇、〇〇〇、〇〇〇	二九二、七二〇、〇〇〇				
農業	ゴム	八〇、四〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇	四五〇、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇二、七八〇、〇〇〇	五九、〇三〇、〇〇〇	—	一、一三六、九四〇、〇〇〇
	其他	三三、五〇〇、〇〇〇							
	計	一二三、九〇〇、〇〇〇	一六五九、〇三〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一、四五二、七八〇、〇〇〇				四、四二三、四四〇、〇〇〇
總計		一二七、九〇〇、〇〇〇	一、九一七、九〇一、〇〇〇	二二〇、〇〇〇、〇〇〇	四、九八七、八三一、〇〇〇				

三

以上によると、日本は僅に鐵、ゴムその他の事業に投資して居るに過ぎない。更に主要邦人の會社を中心に、日本との經濟關係を擧げて見ると、大體左の通りである。

鐵鑛——馬來半島スリメダン石原產業、同トレンガヌ太陽鑛山、同ツングン日本鑛業フイリツピン、マソブラオ日本製鐵等。

石油——ボルネオ日蘭合辦ボルネオ石油會社（三井、日石共同出資）

ゴム——投資額八千四百萬圓、租借面積五一四、五〇五英反、生產額一二二、〇〇〇瓲（一九三三年）主要會社としては、南亞公司（公稱資本三百五十萬圓、拂込二百八十萬二千五百圓）スマトラ興業（公稱三百萬圓、拂込百九十萬圓）、南洋ゴム（拂込濟二百萬圓）、スマトラゴム（公稱二百萬圓、拂込百五十二萬圓）、南洋ゴム拓殖（公稱二百萬圓、拂込九十四萬圓）その他。

マニラ麻——フイリツピン、ダバオに於ける生產額五十萬俵、全比島產額の五割を占む。栽培移民數約一萬五千。

此の外に南洋に於ける漁業、これだけはその實權は殆んど邦人の把握する所で、眞珠貝採貝事業の如き、一昨年來邦人の進出は急速なる發展を見るに至り、近々一二年の內に、世界需要年額五千噸の內その八割までは邦人によつて採貝し、僅な資本を以て四百萬圓の利益を占めて居る。

更に蘭印に於ける商業移民は近年益々增加の傾向にあり、南洋華僑の勢力を漸次驅逐しつゝあることは、洵に悅しい傾向である。吾人はこの場合、これを併行して、投下資本の躍進を希求して止まざるものがある。

太平洋戰略と南洋

一、太平洋の軍備對立

一

以上は南洋の日本に對する經濟價値を述べたのであるが、實に南洋は日本の海の生命線といふべきである。

所が南洋の日本に對する重要なる關係は、同樣な意味に於て、太平洋に於ける米國の一の生命線を爲してをり、英國にとつても亦極めて重要な地位にある。米にグアム、マニラ港あり、英に

シンガポールの軍港ある所以である。從つて軍事的關係を除外して、南洋を觀ることは、最早何等の意味をなさぬといふことになる。

南洋の軍事關係は何を目標にして居るかといふへば、太平洋支配權確立の爲めである。この意味は當然支那にも通ずるのである。それ故に支那と南洋は、政治的にも軍事的にも、これを一體に見ることが出來る。支那を繞る國際關係は、同時に南洋に於ける爭覇戰であると見るべきである。例へば支那問題である。何れの國と雖、支那に於ける勢力が後退して、南洋を把握することの困難なるはいふまでもない。殊に日本の立場に於てこの關係は極めて深刻なものがある。

二

一體世間では、對支外交といふことをよく云々するが、私の見る所では、今日の支那に對しては、外交といふのゝ存在を發見することが困難ではないかと思ふのである。以夷制夷は昔から支那の常套手段である。前にも云つた如く日本を制する爲には、米國、英國、ソヴェツトその他あらゆる勢力を利用するものであるから、對支外交の原則が如何に立派でも、結局ものにならぬ。對英、對米、對蘇の外交が成功すれば、對支外交は立ち所に解決が出來る。この外交の收獲如何

が南洋に反影して、自然に繩張りを嚴にすることが出來る。それを巧妙にやるには、當然最後の力が必要になる。これが南洋に於ける軍事關係の重要視すべき點である。

假りに日本の關東軍が微力で、ソヴエツト極東軍に脅される樣では、滿洲自身が危殆に瀕し、日本の大陸政策の破滅となる。そこで關東軍の强化は、直ちに日本の陸軍そのものゝ强化を意味する。これは、寸刻も猶豫してはならぬ。たゞ日本の陸軍の精强は、世界中隱れのない事實で、支那を擁護し、ソヴエツトを押へるに充分であつても、太平洋の支配權確立を目指してゐる英米には直接響かない。そこで陸海軍を通じて統一ある作戰計畫が必要とされるのである。日本の海軍が西太平洋に儼存する限り、何れの國と雖、支那問題を自由にすることが出來ないのである。これと同時に一面英、米、蘇の海軍力は、日本に對し深刻な影響を齎すことになる。

三

そこで陸軍が大陸に睨みをきかさうとすれば、海軍がその背後を守り、海上の交通を管制して後顧の憂ひを除かなければならぬ。陸軍ばかりが如何に强大であつても、海軍力が微弱であれば何事も出來ない。陸海軍は即ち車の兩輪の關係にある所以は爰にある。この陸海軍で强化して居れば、何時何事が起つても日本の基礎は大磐石である。最近軍部の豫算に對し兎角の批評を爲すものがあるが、私は敢て軍部に媚び、無條件に軍部を禮讃するものではないが、大陸政策、海洋發展策を遂行するには、今日の軍備では如何にも物足りない。これでは背後の力が微弱であると考へる一人であつて、この意味から軍備の費用が增大することは、此頃の日本の躍進振りからすれば、これ亦止むを得ざるものがある。軍費は廣い意味に於て生產的投資である。今日實業家が思切つて押し强く仕事をやり、經濟的にも世界中に發展して居るのは、何を恃みとしてをるかといふと、『貿易は海軍旗に從ふ』といふ原則に依存して居るのであつて、蓋し海軍力の消長が直ちに海外貿易の上に至大なる影響を齎して來ることを知る。

爰に於いて太平洋支配權の確立を目指して活躍する英米の極東海軍力に對して無關心にゐられないのである。英米は日本と共に世界の三大海軍國であることは、いふまでもないが、その現有勢は一〇、一〇、七の割合になつてゐるのである。

四

所が實際は現在竣工してゐる軍艦を全部引つくるめていふと英國が約百二十萬噸、米國が約百

萬噸、日本が約七十五萬噸になる。ワシントン條約で一〇、一〇、六（五、五、三）の比率となつたのは、主力艦と航空母艦だけの事である。今の百二十萬噸、百萬噸、七十五萬噸の中から艦齢の超過した老艦、――艦齢とは、主力艦は二十六年を過ると艦齢が超過する事になる。航空母艦や大型の巡洋艦は二十年、普通の小型巡洋艦は十六年、驅逐艦潜水艦が各々十二年と十三年これが條約で定められた艦齢である。その艦齢を過ぎたものは、時代遅れで第一線に立つて堂々と戰ふ資格のない。それを取去つて勘定すると、その比較は英の百萬噸、米の八十萬噸、日本の七十萬噸、補助艦がのみを比較すると英、米、日が一〇、七、八・六となる。即ち米よりも日本の方が補助艦が優勢になる。これが現在の海軍力の比較である。滿洲上海事變の當時はもつと米國に對する日本の割合がよかつた。

五

各國は後段で述べる如く、今日競つて軍擴に向つて突進してゐるのが、更に太平洋に於ける米、英、蘇三國の海軍勢力、即ちこの三國の所謂極東軍備の現有勢力を見ると、大體左の通りである。

米國

（一）亞細亞艦隊及び東洋方面配備船

巡洋隊一、砲艦一二、驅逐艦一三、潜水艦六、航空母艦一、潜水母艦二、その他計五二隻

（二）太平洋方面配備含衆國艦隊及び太平洋方面局地配備艦船

戰艦一五、甲巡一四、乙級一〇、航母三、補助航母八、驅逐母艦四、驅逐艦八二、潜水母艦二潜水救援艦二、潜水艦四八、敷設艦一、輕敷設艦一、掃海艦九、特務艦八、その他合計二〇七隻

英國

（一）支那艦隊

巡洋艦六、航母一、驅逐艦一〇、潜水艦一五、砲艦一八、潜水母艦一、その他計約六〇隻

（二）東印度艦隊

巡洋艦三、スループ四、特務艦數隻、その他計約一〇隻

（三）濠洲海軍

巡洋艦四、水上機母艦一、驅逐艦一〇、測量艦一、計一六隻

（四）新西蘭艦隊

巡洋艦二、母艦兼練習艦一、スループ二、その他計七隻

（五）印度海軍

スループ五、測量艦一、母艦一、巡邏艇一、トローラ、、計九隻

（六）加奈陀海軍

驅逐艦二、掃海艇二、母艦一、計五隻

ソヴエット・露國

（一）浦　鹽

潜水艦四九、特務艦一九、碎氷船四、河用航空母艦二、驅潜艇九〇以上、驅逐艦五、河用砲艦一六、河用特務艦一、計一八六隻以上

航空力は米國海軍常備機一千三百餘機、英國空軍七百機、ソヴエットは現在陸上機、水上機合せて三千百機餘を備へてゐる。

二、軍縮解消後に於ける列强の軍備强化

一

しかし、爰に我が國としての最大の關心事は、ワシントン並にロンドン軍縮兩條約の失効期（本年末を以く解消）を目前に控へて、各國は無條約海軍の建設に大童の狀態になつてゐる、ことのことである。

歐米諸國が歐洲の險惡なる危局に直面してゐるにも拘らず、最近著しく太平洋方面に重大なる關心を表明し、しかも、太平洋を繞る軍備は、各國とも著しく强化され、英米は早くも明年早々から主力艦二隻づゝの建造に着手することになり、愈々支那の現狀等は、西太平洋に於ける我が海軍の責務を一層重大ならしめてゐるのである。

我が海軍としては、これに對應すべく明年度豫算に於て海軍兵力の整備充實計畫を樹立してゐるが、愈々各國の軍備、外交は全く太平洋に集中され、吾人をして益々『太平洋浪高し』の感を抱かせしむるに至つたのである。

先づ順序として、英米の太平洋作戰計畫を論ずる前に、各國の軍備充實計畫の狀況を一瞥する必要がある。

二

第一に米國である。

米國は曩に屢說の通り、傳統的に强調してゐる支那の門戶開放機會均等の主張を滿洲事變を契機として、これが貫徹の爲には、我が帝國海軍に對しては、絕對優勢なる海軍力の必要を感じ、將に海軍兵力の整備を進めてゐるのである。

今軍備强化の狀況を見るに、產業復興費による一九三三年の海軍擴張計畫及びヴインソン案により、合計百三十四隻、約三十三萬噸に上る急速なる大建艦を開始した。

而して昭和六年以後起工したるものゝ、前記以外の計畫を含み、百五十三隻、四十二萬噸に及び、更に明年より叙上の如く、新に主力艦二隻の建造に着手し、巡洋艦その他補助艦船の建造計畫も傳へられてゐる。

更に航空機についても、後段で說明する民間航空と共に、着々その充實を急ぎ、近く艦隊用飛

行機二千機の整備計畫を進め、一面沿岸に基地を有する航空部隊も擴張せられつゝある。

その他ハワイの軍港施設、太平洋沿岸の防備、根據地水陸等の施設も着々進められ、グアム島の防備再興論も擡頭してゐる。艦隊の如きも、昭和七年以來全力をあげ太平洋に配備し、且太平洋の演習に努めてゐる等、萬事太平洋を對象として軍備の充實に努めてゐる事は注目される。

第二は英國である。

英國は東亞に於いて廣大な領土と、權益を有する關係上、前記の東洋常備艦隊中、近年は特に新鋭の艦艇を選び、支那艦隊に編入しつつある。その他東印度艦隊、濠洲艦隊及び新西蘭艦隊も着々强化しつゝある現狀である。

亦先年來莫大なる經費を以て、建設中の後段で說明するシンガポール軍港は、愈々本年末に竣工の模樣である。その他香港、セイロン及び濠洲の防備を强化し、艦隊の根據地たらしめんとしてゐるので、西太平洋における英國の海軍力は著しく强化されて來た。

航空方面に於いては、英本國から印度、シンガポール、濠洲に至る航空連絡は既に完成し、シンガポールから香港に至る航空路は、上海方面に延びることゝなつた。

一方巨大なる豫算をもつて軍事航空の大擴張を實行しつゝあり、シンガポール、香港航空隊も勢ひ充實せらるゝことになるだらう。

第三はソヴエツト・ロシヤである。

ロシヤは最近絶大なる新式兵團を極東に集結し、各所に大軍需工場の建設、交通運輸機關の整備、極東航空路の開設、新式空軍の擴充に努めつゝあるが、殊に極東海軍の再建を實行すべく、最近英國との間に、締結した海軍協定において、太平洋上の海軍力を無制限になしたることについても、我が海軍として重大なる關心を有してゐる。

即ち前記の如く、浦鹽に於ては既に五十隻内外の潜水艦、十隻の驅逐艦及び數隻の敷設艦があり、小型艦艇も百隻を超ゆるといはれるが、今後増大の形勢にあることは注目されてゐる。亦歐ソより北極の海を廻り、太平洋に進出する北極航路も、昭和七年實現し、夏期數ヶ月間航行が出來ることは、從來の印度洋經由の大廻航路のみに比較すれば、ロシヤ艦隊の移動性は甚しく激増して來た。

第四は支那である。

最近支那は空軍の建設を計畫し、歐洲諸國の指導により、各地に飛行場を建設し、亦航空機の製作人員の養成に努めてゐる。

かくして醸成せられた歐洲列國の支那における航空勢力は有事の場合に帝國としては十分考慮を要するのである。

三

以上は軍縮條約解消後に來る列强の軍備强化の狀況で、これで押し進めてゆけば、太平洋の安全感は、全く失はるゝことになる。從つてこれを以て、完全に今後何人が太平洋の支配權を握るかの競爭の時代に入つたのである。果して日本海軍の膨脹が、かゝる新形勢に應ずべき對策があるのかどうか。

南より英國の勢力が、シンガポールを以て、新しいシブラルタルたらしめんとしてゐるが如く東より來る米國の勢力は、眞珠灣を以て、既にマルタたらしめてゐる。この二大勢力の挾擊に遭つてゐる我が日本は、嘗て影を潜めてゐた、東支那海、日本海の方面より、更に再び亦、脅威をうけなければならないのである。太平洋は依然として不安に、依然として危惧に充ちてゐる。

吾人は、太平洋上に漲る暗雲の頓に、色濃きことを見逃すことが出來ないのである。

三、米海軍の對日作戰と日本の防備

一

扨て、右の艦隊の舞臺は南洋にあることは勿論であるが、一體米國を始め列强の太平洋作戰計畫はどうなつてゐるか。

滿洲事變が起り、上海事件に飛火して、全く日米の感情が尖鋭的に對立し、危く日米戰爭にまで發展しさうになつた時に、米國の海軍當局は、議會に於ける海軍委員會に於いて、これを秘密會として、對日攻擊作戰計畫を發表した。それによると所謂先づ丸型戰術による渡洋作戰を以て對日攻擊をやる。この戰術は、米國全艦隊を動員して、七千噸級の巡洋艦四隻を先頭にして、三百米の後方に驅逐艦を以て、圓形を描き、この中を三つに區分して、主力艦、航空母艦、巡洋艦潛水艦等を配置して、日本の近海まで攻め寄せて、太平洋に於ける各根據地と連絡の下に、各々その行動に移るのだといふのである。

この作戰は專門家をしていふはしめると、將棋でいふ金、銀、櫓の構へといふもので、如何に攻擊力の强大なるかは判る。日本のこれに對する作戰計畫は、素より語る自由を持たぬが、勿論飛行機や潛水艦その他を以てこれに應戰するに先き立ち、逸早くマニラ、グアムの根據地の略取を計畫することになるだらう。

所が試みに太平洋の地圖を披いて、そこに描き出された米國海軍の根據地を一々指點して見ると、マニラ、グアム、ツツイラ、眞珠港、サン・デイゴ、アラメダ、ブレマートン、シツカ、ウラナスカ、キスカを聯絡する參差錯落たる一線は、延長約一萬五千海里に亘る不等邊多角形を描いて、太平洋の西北隅に偏在する日本列島を、南東北の三方から遠卷きにしてゐるのである。しかも太平洋の西の入口には新嘉坡が英國の手によつて握ぎられ、更に太平洋の東の入口たる巴奈鳥は米國の手によつて握られ、一見すると、日本は恰も袋の中に追ひ込められた鼠と同樣の感がある。

二

更にこの距離に於て飛行機は如何なる役割を果すか、最近の空軍の發達は、最も有力なる攻擊

武器として、その飛行機圏内にある所の都市、交通要地、工場等は當然に空襲の危險にさらされてゐるのである。昨年來太平洋定期郵便飛行を繼續中の汎米航空會社は、愈々本年十月廿一日より、桑港を起點としてマニラを終點とする八千二百浬に亘る太平洋定期旅客飛行を開始してゐるが、此の新航路は多分に軍事的役割を持つものである。

かやうに考へると、日本の爲に殘された唯一の通路は、日本海及び東支那海を經て、亞細亞大陸に通ずる西方の一路のみであるが、こゝにもソヴエット・ロシアの浦鹽艦隊は、三千有餘機の飛行機と共に、日本を睨めつけてゐる。併し嘗て浦鹽を起點に旅順、威海衛、青島を結ぶ一線によつて、遮ぎられて居つた昔のことを考へれば、左程でもないが、海軍に於ても、日本が腹背に敵を受けてゐることになつて居る。

これに對する日本の防備を概觀するに、馬公、基隆、奄美大島、佐賀の關、由良、東京灣、小笠原、大湊に至る線を以て、外敵に對して我が領土を保護し、且つ外敵が東支那海に入る道を遮斷する役目を持してゐる。將に我が國防の最終線を勤めるものゝやうである。そこには日本海軍の根據地たる大軍港佐世保、吳、横須賀の三鎭守府があり、前二者が何れも堅固な外壁の中に、安全なる位置を占めてゐるのに反し、獨り横須賀のみは外洋に向つて曝露した形になつてゐる。この意味からして、東京港の外堡たる小笠原群島の存在は、極めて重大な軍事上の價値を持つのである。

三

更にフイリツピンに近い所に、高雄州屏東街の飛行機八聯隊がある。これが作戰上如何なる意義を有するかといふことは、讀者諸兄の御判斷に一任致したい。

更に北に進むと、本島と北海道を分つ津輕海峽に、大湊要港、津輕要港があつて、共に北門の鎖鑰に任じてゐる。下關要塞が瀨戸内海の今一つの口を防衛するものであることは、事々しく説するを要しない。日本海の南の入口には、對馬要塞と、壹岐要塞と、鎭海灣要港とがある。この三個の要塞がある爲に、日本海は完全に日本帝國の池沼となつてゐる。日本海の中になほ舞鶴要港があり、北朝鮮の元山津には永興灣要塞があるが、これは太平洋の作戰からいふと、何れも大した價値がないやうだ。

太平洋の防備關係はかように描かれてゐるのである。戰爭の情景を空想することは、本書の目

的外に屬することであるから、軍艦や兵隊の動き等に就いて述べる必要はないが、若し日米戰ふとすれば、フイリツピン、グアム等を繞つて、相當に激しい、戰爭が展開されることは慥かなことであらう。マニラは我が佐世保から千三百二十浬の距離にあり、行程四日間である。これをハワイの眞珠港より約五千浬、行程十三日に比較すれば、九日間の差異があるから、日本が逸早くマニラの略取を目懸けて突進し、次てグアムの攻略を繞すことになる。米國が如何に强力海軍を持ち、如何なる渡洋作戰によるとするも、西太平洋の根據地を失ふ限り、心臟部を衝かれたことになる。

四

戰爭は斯くして持久戰に入るより外はない。

然るに空軍作戰だ。叙述の米國汎米航空會社は、桑港よりハワイに至り、ミドウエイ、ウエーク島を經て、グアムよりマニラに至る八千二百浬の新航空路の開拓に成功し、更にこれは將來支那の廣東に至る四百浬の新航空路も實現するだらう。尙更にハワイより濠洲に至る南太平洋航空路開發の準備を進め、亦北の方アラスカよりアリユウシヤン群島に至る北太平洋航空路にも着目してゐる。

即ち米國はハワイ經由の中央線と、濠洲經由の南方線と、アラスカ經由の北方線との三航空路により東洋方面への進出を企圖してゐる。

これは叙上の如く軍事的意味を有してゐることはいふまでもない明白な事實である。併し考へるに持續力が大であるといふことは、必らずしも戰鬪力が大であるといふことを意味しない。要は敵の海軍及び空軍が、現に戰時陣形をとつてゐる時、可能的戰鬪圏近くに母艦或は根據地を有せぬ限り、戰鬪力は極めて薄弱なものであるから、假令汎米會社等の飛行機が、最大速力一五七節、航續力三千五百浬を有してゐるとしても、敢えて恐るゝに足らぬが、たゞ米國がこの新航空路開設に於ける貴重な經驗と、着水地に於ける諸種の設備とは、飛行機の機能及び飛行技術の進歩と相俟つて、將來戰爭に於ては相當に効果的に活用されるといふその事は、日本として油斷の出來ない點である。勿論これが更に、對支進出の爲、並に太平洋支配權獲得の爲の有力なる手段であることは言を俟たぬ所である。

かくして現れて來る現象は、貿易破壞戰と、マニラ、グアムの奪還戰とであらうが、殊に貿易

破壊戰は、過ぎし世界大戰にも增して激烈を極めるであらう。

日米戰爭の物語を書いたものは、米國にも日本にも澤山あるが、何れも內容が同じで、日本は開戰劈頭、逸早くマニラ、グアムの兩所を攻略するが、米國のこれに對する奪還は不可能で、米艦隊が止むなく眞珠灣に立往生の醜態を演ずるだらう。そして戰局は一種の持久戰になつて、兩國とも花々しい第二次戰に移ることは六ケ敷しい、結局貿易破壞戰、即ち經濟戰爭の勝敗如何によつて、その國の運命が決るといふのである。

これは承服し得らるゝ議論である。がその事は後廻しにして置いて、太平洋戰爭となれば、次に考へる問題は、英國の米國援助とシンガポール軍港との問題、蘭領印度の軍事的位置の問題を思ひ起さゞるを得ないのである。

四、蘭領印度の軍事的位置

一

日米開戰に於て米國が若し日本艦隊の爲に、マニラ、グアムの根據地を奪取されたとすれば、

米國がたゞボンヤリ眞珠港で立往生してゐるかといふに、さうではない。必ず英國のシンガポール、ホンコン、及び此の蘭領印度に根據地を求めるより外に道がないのである。太平洋の制海權の把握を目指して活躍してゐる米國、同じ問題の爲に惱んでゐる英國と握手して、此處を中心に對日包圍の陣營を張るであらうことは、戰時のみに考へる問題でなく、平時より、その準備と作戰を廻らしてゐるのである。

和蘭には何等の兵備がない、併し米國資本はスマトラの石油特許を獲得してをり、同島の支配階級は、大體に於て親米傾向を有してゐる。それ故に日本よりも寧ろ進んで米國に根據地として提供するは見易き道理で、否、英國もこれを默認するに違ひない。

尤も蘭領印度には土民運動があり、これは亞細亞やアフリカの植民地のそれと同一性質のもので、純粹なる東洋民族として、白人壓制者に對する憎惡の念から、革命的民族主義を標榜して、獨立運動をやつてゐるが、愈々かうなると、有色人種の叛逆兒は白人種たる和蘭本國並にアシグロサクソンに如何なる態度に出づるか、これは戰局に重大なる影響を及す程、決定的のものではないとしても、戰局の推移に伴ひ興味ある國際問題を惹き起すのでないかと思ふ。どこまでこの

重要性を發揮するかは豫想が出來ないが、蓋し注目に値するだらう。

二

所が日本の大海軍を動かす原動力たる石油は、主として米國と蘭領印度から仰ぎ、毎年五六千萬圓の金を支拂つてゐるが、萬一の場合米國からの石油供給が斷たれるとすれば、日本にとつて蘭領印度は、米國の關係以上に日本にとつて、極めて重要な役割を持つのである。――ソヴェット・ロシヤの石油も考へ得られるけれども、戰時に於ては此の國からの供給には相當困難があるものと豫想されてゐる。

だが、若し英國が積極的に參戰して、米國に加擔するとすればどうなるか。

英國の有力な艦隊がシンガポールに據るとすれば、日本は決して樂觀を許さない情勢の下に置かれるであらう。蘭領印度からの石油の供給が自由でなくなるばかりでなく、同島の攻略奪取も決して易々たることでなくなるだらうと思ふ。

併し、英國が果して米國を援助するか否かゞ疑問であるといふ者がある。その論據は、英國の經濟鬪爭は支那に於て、印度に於て、加奈陀に於て、ラテン・アメリカに於て、アフリカに於て

その他世界の凡らゆる市場に於て、米國の爲に後退を餘儀なくされてゐるから、寧ろ傍觀の態度を執るであらうといふのである。これも一つの見方かも知れぬが、曩に述べた英國の極東方針からすれば帝國主義政策を完全に實現する爲には、別言するならば、英米兩國が世界市場を二分し得るが爲には、先づ協力して、日本を斃すことが上々の策であり、後退しつゝある南洋及び東洋方面に於ける商權恢復の手段から當然米國と共同戰線を執ることはあり得る問題である。シンガポールが、日本の發展的勢力に對抗する爲の英國の極東に於ける根據地であると、公然と主張されてゐる事實から見ても、容易に首肯することが出來る。

三

所が爰に假令英國が米國に加擔しても大きな惱みがあるから恐るゝに足らずといふ者がある。曰く、『英國が大艦隊を以て來航の途につくとしても、歐洲に於ける防備の空虛を狙ふ佛蘭西があり、伊太利がある。亦ソヴェット・ロシヤが無いとは誰も斷言が出來ないのであるから、英國が極東に派遣し得る艦隊には自ら制限があり、その勢力は結局曩に述べた支那艦隊、東印度艦隊濠洲海軍、新西　艦隊、印度海軍の聯合が主力となつて、全海軍は擧げてシンガポールに集中す

る筈がない。』といふのである。そこでマニラも、ホンコンも、蘭領印度も易々として攻略することが出來ると決め込んで樂觀してゐるが、最近の英國海軍の極東戰備を見れば、この觀方は早計に失する嫌がなからうか。

五、英海軍の極東視角

一

東洋一の大艦隊根據地シンガポールは、一九二二年度の豫算に頭を出したが、一九二四年、マクドナルド氏の勞働黨内閣が勇敢にも工事中止を斷行したので一寸躓いた。然るに翌年保守黨内閣となつて復活し、それから今日まで十一年間英國式の歩調を以て進捗、愈々一九三七年には豫定通り竣工する迄に至つた。

英國海軍極東戰備はこの一點に集つてゐるのである。この戰備には幾つも動機があるが、その著しい一つは、日本の八八艦隊にあつたこと隱れもない事實である。それは一九二一年、大戰後の極東海軍政策を確立する目的で派遣されたヂエリコー提督が、

『日本も近く八八艦隊を完成するが故に、英國が東洋方面の海上國防を保全する爲には、勸くともそれに劣らぬ艦隊を收容し得る軍港を緊要とする。その目的に對しシンガポールは最適にして、且つ唯一の據點である。』

旨を復命し、それが内閣及び帝國議會の容るゝ所となつた事實によつて明白である。

二

果して然らば、日本の八八艦隊が殆んど半減された今日、シンガポール戰備も規模を縮小するか、或は工事を延ばして然るべきであるが、敢て初志を變ずることなく、略ぼ豫定通り工事を進めて來たことが、極東戰略の目的が何邊にあるかは見遁し得ない事象である。

此の問題に多大の關心を有してゐる勞働黨は、『シンガポール軍港の建設は、米國に對する準備であるか、それとも日本に對する準備であるか。』と議會に於て質問を發した、これに對し保守黨議員ベタース氏は『日本は日に日に進歩してゆく。十年後の國際關係が如何なる形を以て現れるかは、今から豫想することが出來ない。今日日本の政權を握てゐる自由主義的政黨がそれまで政權を維持し得るといふ證言は與へられない。』と、斷言したのである。更に同氏は、『シンガ

ポールの軍港は、或はフイリツピン諸島を防禦する場合に役立つかも知れない。』と、放言してゐる。

殊にグレー卿の下院に於ける前記問題に關して答辯の如きは露骨も甚だしい。彼はいふ。『太平洋上の大海軍國と云へば米國と日本の外にない。英國がシンガポールを軍港化するのは、米國を敵とするが爲ではない。吾等は日本との極東戰爭に備へるのである。此の對日戰爭は、人種戰爭の性質を有するから、米國は吾等に味方して黃色人種征伐に從事するであらう。』と、今日、日英の關係が直ちに戰爭に訴へるやうな危機を孕んでゐるとは思ぬが、英國海軍の想定敵のリストの中には、日本が入つてゐることは慥な事實だ。『想定敵』だからとて、直ぐその國と戰爭でも起るやうに熱ツぽい頭で考へる必要がないが、尠くとも最近の極東の情勢、太平洋の風雲を眺めると、シンガポール要塞の形は、恰度日本の危機に火を付けるやうな廻り合せとなつてゐる。これは日本の爲にも、英國の爲にも決して芽出度いことではないが、軍形の現はれと、時代の關係を見ると、愈々この感を深くする。

三

英國の海軍政策を滿的にいふと、海軍力を有する國を同時に敵としない方針で進んで來た。マクドナルド首相はロンドン會議の當時に『英國は四太平洋を守らねばならない』といつて、その兵力量の犧牲を述べたことがあるが、全く英國としては四面八方を禦がねばならないやうになつては、如何に莫大な富を以てしても、海軍力が保つものではない。否、二つの海を完全に守るのさへ容易なことではないのに、米國、佛蘭西、伊太利、獨逸の外に日本まで相手にせねばならぬやうでは堪まるものでない。日本だつて英國と米國を同時に相手としたら堪らないのと同じだ。そこで聰明な英國の外交は、これ等の關係を適切に處理して、海軍力の一海集中主義をとつて來たのである。これは三百五十年來英國々策が物語つてゐる。近接想定敵たる佛國と伊太利に對する關係、即ち英佛海峽から地中への作戰線に對する英國外交の工作はこれである。そうして一方米國海軍との提携の下に海軍力の一海集中率を高めることが焦眉の急になつてゐる。これは恰もニューカツスル侯が、墺國と結んで、佛の背後を脅かす爲に陸軍大擴張の手段を講じた筆法を、今度は海軍力の一海集中主義の上に心掛けて、海軍力の太平洋集中主義を執ることであらうことは、何人も否定することの出來ない事實である。

英國は今日、太平洋の方面に如何なる注意を向けつゝあるかは、シムラ會商以來、日英の商權は、最近各方面で衝突するに至つたことによつて立證することが出來るが、更に冷靜に英海軍の作戰準備を見ると、シムラ會商以前、即ち今より十四年前一九二二年シンガポール軍港の建設に當つた時から、太平洋集中主義の作戰を執るに至つたと見るべきである。それは、（一）一九二〇年、海軍問題は北海に消え、太西洋に薄らぎ、遂に太平洋に移動したことを認めた英國が、その海軍力の舞臺を東洋の波上に想像するに至つたこと。（二）世界貿易戰商權資本利潤爭鬪の市場が、支那を中心とする極東に集中する傾向にあり、隨つて海軍の任務を此の方面に豫定するに至つたこと。この二つの問題は、尠くとも海軍力の太平洋集中主義の根柢を爲すものである。

この見解に從へば、シンガポールには英國の對極東戰備、就中、對日本の戰備が發達しつゝあるのである。問題は急に促進されるかどうかの一點だ。極東海上軍勢のバロメーターとして、今後こそ吾々の刮目せねばならない計標である。

艦隊方面は、曩に記した通り、支那艦隊、濠洲艦隊、印度艦隊、新西蘭海軍はあるが、一隻の

ド級戰艦もゐない。度々日本へ姿を見せる大巡ケント號が光一の現勢力であるから、無論鐚袖一觸ものであらう。しかし日本は油斷が出來ない。既に英國が決戰力の極めて貧弱なこの極東艦隊に對し、前述の如くシンガポール軍港の完成に伴つて、新鋭艦艇の配置と、その强化を圖りつゝある。シンガポール城の巨影、これに集中する英大海軍の精鋭こそ、對日本への戰備である。

六、經濟破壞戰と日本の國策

一

近代の戰爭は、結局最後に於て、その國の經濟力によつて勝敗が決定する。昔のやうに、お互の軍隊だけが限られた戰場で、討ち合ふだけで運命が決るものではない。武力戰爭は、戰爭のうちの一部分に過ぎない。假令日米開戰になつても、花々しい第二次戰に移ることが、六ケ敷しいだらうといふのが、近代戰爭の特色から見た議論である。

然らば如何。戰爭の全體の形は今までに豫想しない、大きなしかも深刻なものになる。即ち空襲を受ければ防禦しなければならぬ。その上經濟封鎖に對抗して行かねばならぬ。更に敵國民の

續續戰意を挫く爲の思想戰といふやうなものも、深刻に戰はされなければならぬ。かうなると、戰爭は國家の凡らゆるものを戰爭の爲に動員行使するといふことになる。

現に、獨逸などは大戰前に公園等にあるベンチ類を規格統一して、萬一の場合にそのまゝ貨物列車に持ち込み、ねぢ一つひねると立派な腰掛となつて、貨物列車が變じて、客車になるといふ程、周到な用意をしてゐた。要するに國家の經濟も、產業も、技術も、戰爭の爲に再組織して、これを總動員行使して行く。即ち日本でいふ『廣義國防』の計畫內容如何によつて勝敗が決るのである。

二

そこで、ニューヨーク・トリビューン紙の記者ベッファ氏著の『極東戰爭』の中に、日米開戰の勝敗を豫想した記事の中に、『戰爭の勝敗如何は、その時の戰局如何によるもので、徹底した斷定は出來ないが、自然の理窟からいつて、物質力、富、戰爭道具に於て、日本よりも斷然優勢な米國に勝目があると見てよい。』と斷じ、次て曰く。

『但し、開戰當初、日本領海近くで、兩國海軍主力の決戰が行はれる場合は、種々の好條件に惠まれる日本の勝利となることは、各軍事專門家の齊しく認める所である。――

が、併し開戰當初決戰が行はれず、戰爭が永引けば、米國にとつて頗る有利だ。何年續かうと經濟的にビクともしないからである。反對に日本は永引けば永引く程不利な立場にある。』

と、最後の經濟戰爭によつて、日本が斷然閉古垂れるものとみくびつてゐる。更に兩國は『人種的報復感情が極度にまで擴がり、どこの國が仲裁しても聞かない。米國は日本を徹底的に降伏させる所までやる。戰勝の結果米國は恐らく滿洲を手に入れる。さうすることによつて、米國が極東の王者になり得る。』と手前勝手な自己陶醉の言葉を列べてゐる。

三

この觀方は恐らく歐米人の凡てが肯定する所であらう。併し進退兩難の危機に於いて、先づ互にその敵手を苦しめる爲に案出する策戰は、ベッファ氏のいふ抽象的な議論では判らない。最後の止めを刺さうとする貿易破壞戰に對する批判によつて、その勝敗を窺ふ知ることが出來る。

歐洲大戰の起る前までは、敵國商船の拿捕や擊沈は、單に復雜多端な戰鬪行爲の一方面を現はすだけであつて、戰爭全體に於ける重大な部分を形成したものではなかつた。然るに歐洲大戰に

於て、海軍力の劣勢な獨逸が苦しまぎれに敢行した貿易破壞戰は、その將來した結果が、意外に重大であつた。今日では極めて有力な戰爭方法の一つとして認められてゐるのである。日米兩國が相戰ふ時、そこに激烈な貿易破壞戰の起るのは、到底避け難いことである。

四

果して日米兩國が、どれだけの敵國商船を擊沈し、果してどれだけの損害を敵に與へるかといふことは、未知に屬することで、輕々に斷ずることが出來ないが、何れにしても貿易航路の關係からすれば、日本が米國に與へる損害は、米國が日本に與へる損害よりも遙に大であることは豫想が出來る。唯、日本としての豫め覺悟すべき所は、大西洋を航行する日本の商船、北米航路、その外に太平洋を通路とする南米航路、この方面の日本商船は、決定的に危險に迫られる。愈々開戰となれば、その當初に於て血祭にあげられることだけは不平がいふへない。その變りに極東の近海を航行する米國の船舶が、矢張り最初に日本の爲に血祭にあげられるのだから同樣である

然らば他の貿易航路は如何。これは日本は決定的に有利な關係にある。それにしても米國が力を用ゐる所は、濠洲航路であるが、ツツイラ要港を根據地とする米國艦隊が如何に躍起になつてもフイリツピンの西海岸を航行して、セレベス海に出で、マカサツル海峽、バンダ海、アラフラ海を經て、トーレス海峽にかゝる日本商船には、擊沈の機會がないとはいふへないが、思ふ存分の行動がとれないから、これは米國が考へてゐるやうな危險なものではない。寧ろ南洋統治領に根據地を持つ日本艦隊の方が、米國艦隊よりも、より多くの活動圏に惠まれてゐるから、却つて米國の濠洲航路の方が危險に曝されてゐる。先づ日本の濠洲貿易はこの分では安全だらう。

次ぎに米國の南洋貿易であるが、これは殆んど問題にはならぬ。南洋ばかりではない、米國の極東航路が、日本の海軍力によつて、亞細亞海岸が、全部封鎖された形になる結界、全部停止され、外國から支那への航路も、米國からヒリツピンへの航路も、米國から佛領印度への航路も、一つとして繼續の可能性あるものはない。それと同時に米國の西海岸とシンガポール以西との間の交通が停止され、米國から印度へ赴くには、大迂回路をとつて、是非とも地中海を通過して、蘇土を經由しなければならぬことになる。これは米國にとつて隨分苦痛なことに違ひない。

五

日本艦隊のグアム、マニラの占領によつて、完全に米國の太平洋航路、即ち極東との交通、印

度との交通、南洋との交通、濠洲との交通――これ等の一切が全然遮斷されるか、それとも阻害されるのである。米國に殘された太平洋の交通路は、たゞ僅に北方加奈陀との交通、及び南方南米との交通路だけである。これとても全然安全とはいふへない。航續力一萬海里といふはれる日本の潜水は、よく桑港亦はロス・アンゼルスの近海に到達して、そこを航行する米國船に氣味惡い魚雷の御馳走を振れまふことも出來るのである。況んや米本國とハワイの眞珠灣とを聯絡する二千一百海里の航路は、日本の奇襲艦艇には與へられた、絶好無二の獵場であつて、米國はこの間の安全辨を講ずる爲には、當然多大の犧牲を拂はなければなるまい。

所が日本はどうか、日本の近海航路、支那航路、印度航路、南洋航路、東アフリカ航路、地中海航路に至つては、先づ原則として襲撃不可能であるといふつてもよい。米國艦隊がどれほど勇猛果敢であつても、これを脅かすことは絶對に出來ない。たゞ英國が米國に加擔して、英國兩國が共同戰線を張つて航洋潜水艦でも使用することになれば、絶對に安全だと保證することは出來ない、我が商船の蒙る災厄は覺悟しなければならぬ。

大體に於てこの貿易破壞戰は、我が國に有利に展開される。この一事は厚く運命の神に感謝すべきことである。萬一にも日米兩國の關係が逆になつてゐると、日本は大切な貿易を破壞された上に、自國の食糧にも困るやうなことにならんとも限らない。富の程度に於て日本はやつと米國の七分の一乃至八分の一にしか當らない。勿論攻撃野戰の雄たることは必要であるが、經濟的に蹉跌しないように心懸けねばならぬ。

六

惟ふに太平洋の陣形は、一見すると日本が恰も袋の中に追ひ込められた鼠と同樣の感があつて心細いやうではあるが、幸に日本海から東支那海を經て、亞細亞大陸に通ずる西方の一路あり、尤もこの方面にソヴエツト・ロシヤの軍形が、日本の行動を遮る危險があるが、これは日本の太平洋政策によつて、平常からこれを閉鎖して置く準備が必要で、先づこれより南洋に通ずる路が開けてゐることは、日本にとつて天惠といふはなければならぬ。乍併、亞細亞大陸のみに通ずる路だけが開かれて、南洋方面が封鎖されたとしたらどうか。それこそ、日本の致命傷で、心臟を衝かれたことゝなつて、手も足も出ないだらう。

爰に於て、日本の國策が大陸政策と海洋發展策の問題が、平時から調和併進して、相互の關係

を密にして置くことが、萬一の場合に處する唯一の方法でなければならぬ。叉に述べた海洋發展策は、我が大陸政策の培養線たる所以がこゝにあるのである。

眞に日本の國防力、產業力の强化を期するには、以上主要國の太平洋作戰から見て、大陸發展のみを以て、尙充分なる要素たり得ざるは、屢々述べた所である。況んや戰時に於ける經濟破壞戰に備へる方面からいふつても、日本は更に海外隣接區域に、重要必需品の原料を求むる爲に、海洋の安全を維持し、その撤入を自由確實ならしめるために、海洋發展を併進する事に於て、始めて叉に眞に綜合國力の强化を期し得るのである。

——（完）——

旋風裡の極東外交と軍事

定價 金三十五錢

昭昭十一年十一月十日印刷
昭和十一年十一月十五日發行

著者 角猪之助
發行者 東京市京橋區寶町一ノ一東京ビル 赤島秀雄
印刷者 東京市芝區西久保巴町三〇番地 近藤喜七
印刷所 東京市芝區西久保巴町三〇番地 順弘社印刷所

不許複製

發賣所

東京堂 東海堂
北隆館 大東館

329
672

終